
けいおん！プラス

心葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！プラス

【Nコード】

N8510N

【作者名】

心葉

【あらすじ】

共学になったばかりの桜校に入学した田辺優生。新勧の日に出会った平沢唯と一緒に軽音部に入部して……。
(ド素人の文章で更新が遅く分かりにくい文章でさらにグダグダでもOKの方はぜひ読んでください。またややせりふの割合が高いかもです。)

桜校！

ホーホケキョ

ホトトギスが鳴く中、俺は元女子高である桜高で入学式を受けていた。・・・にしてもマジで話長いでしょ。実際にうとうとしてるやつもいるし。まったくコレだから校長の話ってのは……………

「……………というわけで話はコレで終わりますが、皆さんよい高校生活を送ってください」

やっと終わったぜ。

「では、これから各クラスに移動してください。」

それにしてもやっぱ、男子少ないな。まあ今年から共学になったことだし、しゃあねえけど。

教室に着くと今度はやっぱ担任の長話だよな。まあいいか。和輝のやつもいることだしな。あいつとはかなり付き合い長いからな。

という訳で、担任が長々と話している間、俺は隣に座っている和輝と話していた。

「そつえばさ、優生は部活どうすんの？」

「まだ決めてない。新入生歓迎会と貼ってあるポスターを見て決めるつもり。」

「じゃあさ、野球部作るの手伝ってくれない？共学になったの今年からだからまだ無いと思うから。」

「考えとくよ。」

「いい返事を期待してるよ。」

「その二人。確か田辺優生君と高橋和輝君だったわね。今は私が話してるから私語は謹みなさい。」

「「すいません。」」

放課後になると、俺はまず和輝と部活のポスターを見に行った。

「えーと、卓球部に吹奏楽部に文芸部に美術部に・・・ってやっぱ運動系の部活って少ないな。」

「まあいいんじゃない。どうせ作るつもりなんだろう、野球部。」

「そうだけど、あと7人も集めるのって結構大変だぞ。何しろ男子は1年生しかいないんだからな。」

いつの間にか勝手に俺まで数のうちに入れられているけど、入るって返事した覚えは無いんだけどな。どちらかというと野球よりもバンドみたいなのやってみたいな。などと考えていた。

「優生、早く行くぞ。」

「へ、どこに？」

「何言ってるんだよ。新入生歓迎会だろ。早くしないと席が埋まっちゃうだろう。」

「ちょっと悪いけど先いつて席取つといて。トイレいつてくるから。」

「仕方ないな早くいつて来い。」

校舎の中にはもうほとんど1年はいない。みんな歓迎会がある講堂の方に集まっているからだ。

ちょっとあせつて角を曲がると、ちょうど向こうからやってきた人とぶつかった。

「ごめん。大丈夫か？」

とつさに謝った。制服はまだ新しそうだから1年だろう。茶髪で前髪にヘアピンを付けた女の子だった。

「こっちこそごめんなさい。」

「いや、俺はいいんだけど腕のとこ少し切れてるぞ。」

「あ、本当だ。でも痛くないから大丈夫だよ。」

痛くなくても女の子なんだから一応保健室に送っておいたほうがいいよな。」

「でも一応保健室に送っていくよ。」

「ありがとう。」

そのあと俺は一応、怪我をさせた罪滅ぼしをしたのでさっさと和輝のところに行こうとしたところ

「そつえば、名前なんていうの？」

と、話しかけられてついつい足を止めてしまった。

「田辺優生だ。ついでに言っておくと1年4組だ。」

「え、4組なの。私も4組だよ。わたしは平沢唯っていうんだ。よろしくね、ユウ君。」

いきなりあだ名かよ。

「ああ、こちらこそよろしく。けど、そのユウ君って何？」

「あ、ユウ君って嫌だった？じゃあ・・・」

「嫌とかそういうのじゃなくてなんでいきなりあだなつてんの？」

「だって優生君でしょ。だからユウ君。」

だめだこりゃ。まったく話に通じてねえ。天然すぎる。ここは張り

合わないほうが身のためだな。

「まあいいや。じゃあ俺は新入生歓迎会見に行くから。」

「待って、私も見に行きたい。」

「なら早く来いよ。急がないと終わっちまうぜ。」

桜校！（後書き）

” 不定期更新＆更新まで間が長い ” になると思いますが、気に入ってくれましたらどうぞごひいきにお願いします。

始動！（前書き）

なかなか読んでくれる人いないけど一応言っておきます。
だいぶ長い間更新できなくてごめんなさい。

始動！

「おーい優生、こっちこっち。」

前のほうで和輝が手を振っていた。内容的にはもう半分ほど過ぎたころだろうか。

「悪いちよつと遅れた。にしても結構いい席取れたな。」

「いや俺は全然いいんだけどもうだいぶと終わってるぜ。あれ？その後ろにいる女の子は・・・まさかもう彼女をゲットしたのか！俺としたことがお前に負け・・・勝手に勘違いするな。」・・・分かってるって。お前にこんな早く彼女ができるわけ無いだろ。」

何気にからかわれたようなひどいことを言われたような気がするが、あえてここは突っ込まないでおくことにしよう。まあさらに言うところ横で”彼女”という言葉に反応して赤くなってる平沢のためにも訂正しておこう。

「こいつはさつき廊下でぶつかってちよつと怪我させっちまったから保健室に送ってきたところ新入生歓迎会をみるためについてきたってわけだ。ちなみに平沢唯っていつてうちのクラスのやつらしい。」

和輝は当たり前前に知ってる顔で平沢の自己紹介についてしゃべった。

「ああそれくらいしってるぜ。自己紹介してたじゃん。休日は家でごろごろ、好きなものはおいしいもの・・・だったかな？」

俺と話しながらよくもまあそんなに聞いてたな。

「へえ、よく覚えてるね………かつちゃん。」

うわ、出た。平沢の必殺技、いきなりあだ名。それにしても和輝は、かつちゃんか。

「か、かつちゃんって……」

「はい、平沢にいちいちその辺は、突っ込まないように。」

「わ、わかった。」

うんうん、人間素直がよろしい。

『次は、マジック研究会です。』

「お、次ぎ始まるぜ。早く座れよ。」

「じゃあ平沢お前座つとけ。俺は立ってても大丈夫だから。」

「え、でもこの席ユウ君が頼んでおいたんでしょ。そんなの悪いよ。」

そうやって、押し問答していると、めがねをかけた優等生っぽい女の子が来た。

「唯、こんな所にいたの。探したのよ。」

「あ、和ちゃん。」

誰だ？

「あなたたち、うちのクラスの田辺君と高橋君だったわよね。もしかして唯が何か迷惑かけた？」

「和ちゃんひどい。最初から迷惑かけたかどうかなんか聞かなくてもいいじゃん。」

一応平沢の言っていることは正論なんだけど、実際ちょっと思い当たる節があるのでなんともいえない。

「だって唯、よく知らない人にぶつかったりして迷惑かけるじゃない。」

ずばり的中。もしかしてぶつかったりするのには平沢にとっては日常茶飯事なのか。

「そんなに迷惑かけてないよ。・・・そりゃユウ君とは廊下でぶつかちゃったりしたけど。」

「ほらやっぱり迷惑かけてるじゃない。田辺君、唯が迷惑かけてごめんなさい。私からも謝っておくわ。」

あんたは平沢の保護者か。

「いや別にたいした問題じゃないからいいよ。」

パチパチ

どうやらと呼ばれたやつと話している間にマジック研究会の出し物は終わってしまったようだ。まあ、入るつもりは無かったからいいけど。

そういえば、和輝のやつは今の話は完全にスルーしてたな。

今の拍手のせいで完全に会話が途切れてしまい、平沢たちは元からとってあった自分たちの席の方へと戻っていった。

新入生歓迎会から1週間たった日の昼休み、いまだに部活をどうしようか俺は悩んでいた。あの時見た限りでは、どうやらこの学校には軽音部なるものは無いみたいだし、かといって和輝の思惑にはまった感じになるのは嫌なので野球部に行く気は無い。

さーてどうしたものか。

やっぱり文芸部にしようかな。もともと第2候補だったし。

なんて考えていると、俺のせきの2つ後ろで平沢と真鍋が話している内容が聞こえてきた。

新入生歓迎会〓新勧のとき真鍋の名前が出てこなかったことを反省して一応クラスメイトの名前は全員を覚えなおしたので誰かと間違えることは無い。

「あ、和ちゃん。実はどの部活に入ろうか迷ってて。」

おー、俺以外にもまだ部活を決めてなかったやつがいたか。

「え！まだ決めてなかったの！」

「でもでも、私運動音痴だし、文化系のクラブもよくわかんないし・
・・」

「はあ。こうやって二ートが出来上がっていくのね。」

ギクツ。

「部活やってないだけで二ート！」

「振り返ってみると、唯って今までなんの部活もやって来なかったもんね。」

よかった。どうやら平沢よりはましな区分か。一応中学のころは完全補欠ながらも野球部に入ってたからな。

などと安心しているところに和輝が来た。

「優生！実は重大な発表が。何と野球部員が一気に増えて12人まできました！なんか入るやつのおまけみたいな感じで何人か付いてきたから、ラッキー。」

これで俺が入る義理もなくなったな。

「では、和輝くん。こちらからも重大な発表があります。私、田辺優生は野球部に入るつもりはありません。ってことでよろしく。」

「えゝ、何で。なんかほかに入る予定あるの？」

やっぱりというか何と言うか、和輝は当然食い下がってくる。

「いや、何も。まあもう高校生だし勉強中心でつてことにしとく。」

「はあ。こうやって二ートが出来上がっていくんだな。」

グサツ。さっき真鍋が言ってたこととまったく同じだ。

ついでに、今の会話が聞こえていた平沢が来た。

「ねえ、ユウ君もまだ部活決めてないの？」

「ああ、一応な。」

やりたいことは決まっているがそれをするところがないんだよな。

「ああ、よかった。わたし一人じゃなくて。」

「よかったじゃないわよ、唯。早く部活決めちゃいなさいよ。」

若干涙目になっていた平沢だが、あくまで自業自得なので助けるつもりはさらさら無かった俺であつたが、

「お前も早く入部届けだせよ。」

という和輝のせりふに少しながら、平沢に仲間意識を持った。でもまあ、明日もう1回掲示板見てから決めたらいいか。

次の日の朝、校舎に入る前に掲示板をのぞいていったところ、喜ばしい事を見つけた。

何と、最初に見たときには無かった『軽音部』のチラシが張っていた。

よっしゃあ。これで二ート脱出だ。

そのあとすぐに、教室においてあった入部届けに軽音部を書いて音楽を担当している山中先生に出した。

そのとき聞いた話だと今の軽音部はかなり人数が少ないらしい。さらに初心者らしい人も俺以外にもいるらしい。

ふう。コレでそうそう浮かなくて済むな。

さっそくその日の放課後から音楽室に行ってみることにした。

お、誰かいる。あの人が部員なのかな？・・・ん？まさか平沢か？何か考えているみたいだけど。

「平沢？」

と、声をかけてみると

「ひー！ごめんなさい。」

いきなり謝ってきた。訳も分からず俺はちょっとびっくり。

「いきなり謝られても、困るんだけど。とりあえず説明してくれな

い？」

俺だと分かると少し落ち着きを取り戻して、説明し始めた。

話の順序がめちゃくちゃなのでまとめると、

1 昨日、和に何か入れといわれたので掲示板を見に行った。

2 すると軽音部のチラシをみて、軽い音楽と書くので口笛などしかやらないだろうと思った。（はい、ここ注目。口笛ばかり吹くクラブってどんなんだ。）

3 というわけで入部届けを書いたが和に本当にやることを教えてもらった結果入部不可能と判断。

4 で、入部を断るために来たがいざとなると怖くて入れずにいるところに俺が来た。

というわけだそうだ。

「ねえ、ユウ君一緒に来て断ってくれない？」

さっきの説明の段階で読めてたパターンだな。

「まあいいよ。どうせ俺も音楽室に用があるし。」

「すみません。」

そういつて音楽室に入ると、中にはカチューシャをした女の子と、黒髪のストレートヘアの女の子と、お嬢様なオーラが出ている

女の子の3人がいた。

「あ、もしかして新入部員の平沢さん？」

「いやそれは俺じゃなくて、こっちです。」

そういつて後ろにいた平沢を差し出した。

今から断らなきゃいけないので、少しあがっていた。

「あ、テンポ悪くて使えないどじっ子。」

どんな認識のされ方してんだよ。

「もしかしてあなたが平沢さんだったの？」

「は、はい。」

「いろいろ誤解しててごめん。ギターがすごく上手いんだよね。来てくれるの待ってたよ。」

なんか、あらぬ尾ひれが大量についてるな。

「よしっ、ムギ、お茶の用意だ。」

それから断りに来たはずの平沢は、すっかりお茶に誘惑されながらも3人の質問攻めにあっていた。

そんな中ついに切り出した。

「あの、申し訳ないんですけど実は、入部するのやめさせてくださいって言いに来たんです。」

チーン

空気が死んだな。

さすがの平沢も空気が悪いと読んだか、早々に帰ろうとした。

「ごめんなさい、それじゃ。」

「ちょっと待って。」

カチューシャが何とか阻止しようとしている。何せ廃部の危機だからな。

そんな状況を見た俺はひとつの打開策を思いついた。

「なあ、演奏してやってみたらどうだ。」

「おお、それだ!」

「え、何?演奏してくれるの。」

案の定食いついてきやがった。

「よっしゃあ、じゃあ準備するぞ。」

3人とも音の調整が終わると、カチューシャの合図で始まった。

「ワン、トゥー、スリー、フォー」

♪ ♪ ♪ ♪ ♪

演奏が終わった。

パチパチ

カチューシャが平沢の拍手にテレながらも感想を聞いた。

「どうだったかな。」

「なんていうか、言葉にしにくいんだけど・・・あんまりうまくないですね。」

なんともまあ、ばつさりと切ったな。

「でも、なんかすごく楽しそうでした。私決めました。この部に入部します。」

カチューシャと黒髪の二人がお互いにほっぺをつねりあった。

「ばんさい!」

ふう、コレでひとまず一件落着かな。でもなんか忘れているような・・・あ、俺も新入部員だった。

そのとき思い出したかのように黒髪が俺のほうを向いた。

「そっいえば君、誰?」

「え、俺か？俺も一応新入部員だけど。」

「え？そんな入部届け知らないけど。」

そんな馬鹿な。俺は確かに朝、山中先生に提出したはずだ。

「じゃあ今書き直『ガシャン』」

いきなり扉がすごい勢いで開いた。

「ごめん、今もう1枚入部届けあるの忘れてたから持ってきたわよ。」

といって入部届けの紙を置くと駆け込んできた山中先生は戻って行った。

そしてそこにはちゃんと、『田辺優生』の文字があった。

「あ、ここにあった。」

また二人がほっぺをつねり合った。

「イエイこれで5人。廃部脱出だ！」

そう言うとかチューシャはおもむろにかばんからカメラを取り出した。

「よし、じゃあ軽音部活動開始を祝って写真撮ろうぜ。」

「あ、それ私のカメラ」

と黒髪が言った。おいカチューシャ勝手に人のもの使うなよ。

パシヤッ。

始動！（後書き）

これからが本編突入。

メンバー！（前書き）

相変わらず更新がかなり遅いです。

メンバー！

軽音部の復活が決定した次の日、俺はさっそく部活に行くことになった。もちろんだが平沢も連れて。

「ねえねえ、ユウ君。今日のムギちゃんのお菓子なんだろうね。」

やはりというか何というか、こんなやつをつかまされてこの先軽音部は大丈夫なんだろうかと心配になる。

「お前、軽音部は琴吹にたかるためにあるんじゃないんだぞ。分かってんのか？」

「うん、それくらい分かってるよ。」

「こんにちは」

「ちわーっす。」

部室に行くと、もう他の3人の姿はすでにあつた。

そういえば会話で名前は、分かっているけどちゃんと自己紹介とかしてなかったな。

「そういえば、みんなまだ自己紹介してなかったから今しないか？」

「そういえばそうだな。」

「はいはい、じゃあまず部長のあたしから。田井中律です。クラスは1 - 2だぜ。」

へー、田井中か。変わってるな。よく田中とかだったらいるけど。

「じゃあ次、私。琴吹紬です。ムギって呼んでください。」

やっぱりどっからどう見てもこいつはお嬢様キャラだな。

次は、黒髪のやつだな。

「……………」

自己紹介が始まらない。

「おい、早く自己紹介始めろよ。」

「あ、秋山……。……です。よ、よろしく。」

……コレって恥ずかしがり屋だからとかなのか？

まあいいや。

「じゃあ次は私「平沢、めんどいからお前はしなくて良い。」えー、なんで。」

みんな同意のしるしにうなずく。

なので、平沢の文句はスルーして自分の自己紹介をすることにした。

「そんじゃ、最後は俺な。田辺優生です。クラスは平沢と一緒にだから。」

と、全員の自己紹介が終わったので、ティータイムに入った。

まだ若干空気が固いのを本能で読み取ったか、平沢が質問タイムを始めた。

「ねえねえ、漣ちゃんは何でギターじゃなくてベースやろうと思ったの？」

「だってギターは………は、恥ずかしい。」

「恥ずかしい!？」

平沢のやつは驚いてるけど俺はなんとなくそうだろうなと予想はしていた。さっきの自己紹介だけであれだしな。

「ギターってバンドの中心で感じて先頭に立って演奏しなきゃいけないし観客の目も自然と集まるだろ。自分がその立場になるって考えただけで……」

シュー

え、ちょっとちょっと恥ずかしがり屋にもほどがあるでしょ。これって大丈夫なのか？

「み、漣ちゃん!？」

「あー、漚ならほつといてもそのうち元に戻るから大丈夫だよ。」

田井中がフロアに入った。

「そつか、じゃあ大丈夫だね。そういえばムギちゃんキーボードうまいよね。キーボード歴長いの？」

「私、4歳のころからピアノを習っていたの。コンクールで賞をもらったこともあるのよ。」

うわーますます謎の人だ。

聞いた本人も啞然としている。が、立ち直りは早い。

「ところでさ、ずっと疑問に思ってたんだけどこの部屋ってやけに物がそろってるよね。」

「ああそれは私の家から持ってきたのよ。」

「「自前!」!」

いったいどれだけのお嬢様なんだよ。このままじゃ、SPもいると
か言い出しかねないんじゃないか。

そう思うと少し冷や汗が出てきた。

数分後、軽いショック状態から抜け出した平沢はまた懲りずに今度は田井中に質問しようとしたが、

「りっちゃんは・・・やっぱドラムっばいね。」

聞かずしてイメージが付いていたようだ。まあ、そういう俺も確かに田井中がドラムっぽいというイメージは付いていたけどな。

「確かにがさつつて言うかおおまかつて言うかそんな感じがするのは確かだな。」

俺からの思いもよらぬ攻撃のせいか田井中は意地を張ってしまった。

「んなつ！？私にもちゃんと始めた理由があるんだから聞いてよ！」

「へへあつたのか。／＼だ。で、何？」

「うつ。そ、それはえくと、あれだよ。………かつこいいから。」

ようは、無いに等しいってことだな。

「ないんじゃない。」

「だってギターとかベースとかキーボードとかってちまちましてて、考えただけでなんかむしゃくしゃしてくんのよ。」

「……まさかそれだけ？」

「うん、それだけだよ。」

楽器を選ぶときってそれだけで良いのか？

秋山がふと思いついたように平沢と俺に質問してきた。

「そういえば平沢さんと田辺君はもうギターとか買った？」

「唯で良いよ。私もう漣ちゃんって呼んでるし。」

「つっこむところはそこか！」

「じゃ、じゃあ、唯。」

そのとき俺はとつさに顔を背けた。どう考えてもあの表情はかわいすぎる。ちよつとあれは男として見続けていたらほんとにやばかった。

「つてさっきからこのムードだから忘れてたけど、ここ軽音部だったんだな。」

「俺は、中3のところに押入れの奥から出てきた親父が学生のころ使ってたエレキがまだ使えるから大丈夫。あ、あと俺も名前で呼んでくれても良いから。」

「さっきのことがあったからまだ秋山の顔を直視できないので少し視線をそらしながら答えた。」

「う、うん。じゃ、じゃあよ、よろしく。ゆ、優生。」

秋山も遠慮がちにそう呼んだ。

「それで唯はもうギター買ったのか？」

「いやあー、ギターやるの忘れてた。」

ハア―

当の本人以外のみんなはやれやれといった感じで、ため息をついた。

「そういえば、ギターっていくらくらいするの？」

なんて根本的な！

という俺の驚きはみんな無かったようだ。慣れるの早すぎるだろ。

「安いのは1万円くらいからあるけど、あんまり安すぎるのはよくないから3万円くらいからかな。」

「3万円！私の半年分のおこづかい・・・」

あまりの高額に怯んでしまっている。そりゃそうだな。普通そんなに貯めてないもんな。でも、それならギターどうすんだ。

「そうだ、りっちゃん。部費で落ちませんか？」

「落ちません」

ガーン

今の事態がマンガとかだったら一気に真っ暗になっていたことだろう。

やれやれ、まだコレじゃあ練習開始はしばらく先だな。

バイト？

あの後話し合った結果次の日曜日、つまり今日平沢のギターを身に楽器屋へ行くこととなった。

もちろん軽音部全員で。

そんなわけで今約束の時間の10時を過ぎてるんだが、平沢だけが足りない。あいつは本当に自分の楽器を買いに行くという自覚があるのだろうか？

「なあ、田井中。平沢の携帯の番号知ってたらちょっとかけてくれないか？」

「OK。え〜と唯の番号は・・・」

田井中が電話帳で探していると、

「あ、来た来た。おい唯、こっちこっち。」

秋山のやつが平沢を横断歩道の向こうに見つけた。

平沢も手をふり返してきた。

だが、そこから普通に来れないのが平沢だ。

走ってくると、途中で人とぶつかり、さらに渡りきったと思えば散歩の途中の犬とじゃれあい始めた。

やれやれ、なぜほんの数メートルなのにたどり着かない。

「で、唯ちゃん。お金は用意できたの？」

「うん。お母さんに無理言って5万円前借りさせてもらった。」

前借りすることが成功したのは良いんだが、少し疑問がわいた。

「へえ、よくそんなに前借りできたな。」

「憂にも一緒に頼んでもらったから。」

みんないつせいに頭の上に？マークが飛んだ。憂って誰だ？

「ねえ、唯。憂って誰なの？」

田井中がみんなを代表するように聞いた。

「あれ、みんなにはまだ言ってなかったつけ。妹だよ。」

そういつた瞬間みんなは唯2号を想像した。

「でもお金って必要になるかわかんないよね。これからは計画的に使わなきゃ・・・いけないんだけど。この服かわいい・・・今なら買える。」

このまま放って置くと本当に服を買いそうなので止めに入る。

「おいおい、そのお金はギター買ったためだろうが。」

「大丈夫だよ。ちょっと見るだけ。」

そういつて店の中に入っていた。

そうなれば、もう遊ぶペース全開。100円ショップにゲーセンに喫茶店とすっかり本来の目的を忘れたようにうろつろしていた。

その間さすがに俺はみんなと一緒に女物しか置いていない服屋に入る根性はなかったので、近くの本屋で時間をつぶしていた。

それから2時間後やっと本来の目的を思い出したみんなと合流した。

「もう、遊ぶのは終わったのか。」

あえて冷静に低い声で言つて脅しをかけてみた。

「ユウ君、ごめんなさい!」

先頭を切つて遊んでいた2人、平沢と田井中が謝った。

「ほら、だから言っただろ。」

秋山はそういつて注意しているが、結局一緒になって遊んでいたんだから同罪なんだけどな。

まあ、これ以上脅すのはかわいそうなのでいつもの口調に戻った。

「じゃあ、さっさと楽器買いに行こうぜ。」

「うん。」

↓ 10GIA店内↓

「すごい。ギターがいっぱい。」

店内にずらりと並ぶギターを見て平沢は驚いているが、コレぐらい普通だろとはじめて来た俺でも驚かない。

「で、無駄に時間食ったんだから早く決めろよ。」

と、発破をかけつつとりあえずギターのチューナとかを見に他のエリアに向かう。

しばらくいろいろな器具を見ていたのだが、あいにく今日は持ち合わせがあまりないのであきらめることにした。

まあ、そのうちまたここに来るはめになるだろ。

みんなのところに戻ってみると田井中と琴吹が何やら盛り上がっていた。

現状を確認するために小声で秋山に聞いてみた。

「おい、秋山。あの馬鹿2人は何なんだ。人目を気にせず盛り上がっているが。」

「唯が、どうしてもあのギターが欲しいって言ってるんだけど、値

段見てみたら25万円もするんでどうしようか言ったらなんか急に律がバイトしようって言い出したんだ。そしたらムギも便乗して今の状態になってるんだ。」

「へー、バイトねえ。」

と言いつつそのギターを見てみると、どう考えても女の子には太すぎると思うネックだし、多分だいぶと重いと思うんだけど何でこんなのを選んだんだあいつは。

「あれ、優生。いたんだ。」

田井中は今まで気づいていなかったらしい。

「さっきからいたって。」

「あ、ごめんごめん。そうそう、これからみんなで唯のギターを買うためにバイトすることになったからよろしくね。」

はあ。やっぱりそのみんなの中には俺も入っていたか。

「まったく人がいないうちに勝手に決めんなよな。しょうがねえな。」

と、しぶしぶそうに返事しとくが内心はまんざらでもない。バイトと言っても1人でやるわけではないので少しは楽しめるだろう。

（翌日）

「で、どんなバイトにしようか。」

いつものティータイムをしながらバイトの内容を探していた。

「俺は休日なら基本的に空いてるから1日やってるのも良いから。」

先に条件を付け加えておく。

まあ、この位しないと25万円なんて早々貯まらないからな。

「じゃあ、ティッシュ配りとかは。」

「ファストフードはどうですか。」

という提案に秋山は少し考えたあとまたいつものように機能停止状態になった。

「秋山がこの様子だから却下。」

コレだと人とあまり関わらないバイトが一番いいな。

そのとき、いきなり秋山が立ち上がった。

「やっぱり私何でもする。」

そのせりふからは何だか決意のようなものが感じられた。

やけに張り切ってるな。

「あ、コレなんかどう。」

そういつて田井中は、あるひとつのバイトを指し示した。

『交通量調査』

「交通量調査って何、りっちゃん。」

「歩いてる人や車の数をカウンターを持って数えるやつだよ。」

「ああ。野鳥の会だね。」

若干狂った例えを導き出す平沢。これでこそ平沢だな。最近コレも馴染んできてるな。

「コレなら濡もできるでしょ。」

「本当ですね。」

なるほど。コレなら人と関わることはほとんどないから安心だな。そこまで考えてたとは、さすが親友といってるだけのことはあるな。よく見れば日付けも休日だし、日給も8000円で悪くない条件だな。

「いいんじゃないか。」

「じゃあ、部長案として多数決をとります。賛成の人、手挙げて。」

「「「はい」」」

声までつけて手を上げる平沢と琴吹と田井中。

少し控えめに手を挙げる秋山。

そして、少しめんどくさそうに手を挙げる俺。

つまり軽音部全員の賛成が決まった。

「よし、決定。じゃあ、このバイト申し込んでくね。」

こうして、平沢のギターを買うためのバイト大作戦？が始まった。

バイト？（前書き）

遅くなつてすいませんでした。

・・・そついえば毎回これ言ってるような。

バイト？

バイト初日、さすがの平沢でも自分のためと言つ自覚があるのか、珍しく遅刻せずにやってきた。

「あ、唯。はい、これがカウンターだから。」

もらったたんカチカチとカウンターを押し始める。

なので一応俺は止めておく。それでもやってたら知らないが。

「おい、遊ぶなよ。」

「えへへ。」

と、笑ってやめたと思ったら、今度は田井中がはじめた。

「じゃあ次は私だ。」

平沢より早く押す。

だが次の瞬間指をつつた。

「あうっ。」

まったくやれやれだな。

「むきになるからだ。」

という訳なので俺は、指をつった馬鹿な部長をほっというてバイトの説明をする。

「このバイトは2人ずつ1時間ごとに交代だからみんな2周したら終わりな。」

「では、調査開始までもう少しありますね。とりあえずお茶にしましょう。」

平沢はその言葉に目ざとく反応した

「わーい。じゃあ、あっちの公園に行こう。」

「時間を忘れるなよ。」

「バイト開始」

そのあとくじで決めた順番を元に公平に組み合わせを決めた。

1組目 俺 平沢

2組目 秋山 田井中

3組目 平沢 琴吹

4組目 俺 田井中

5組目 秋山 琴吹

俺は最も怠けそうな2人と当たってしまいすっかりしなければなら
ないと言っ状況に陥ってしまった。

ブーンッ

カチッ

「ねえ、ユウ君」

「なんだ。」

「いい天気だねえ。」

ブーンッ

カチッ

「・・・・・・・・」

お前は年寄りか！と突っ込みたくなっただが口には出さなかった。

無言になったからまた新たな話題を出してきた。

「ねえ、ユウ君。」

「今度はなんだ。」

「何でユウ君は私のこと平沢って呼んでるの。軽音部の仲間だから
唯で良いよ。」

ブーンッ

カチッ

「そりゃ、なんとなく呼びにくいからな。でもまあそっちが良いって言うならそうさせてもらっけど。」

「うん、そうして。」

「じゃあ、唯ってこれから呼ぶよ。」

ブーンッ

カチッ

（1時間後）

「おーっす。交代に来たよ。」

田井中たちが交代に来た。

「お、じゃあバトンタッチな。」

そっいつて俺と唯は、琴吹が待つ待機用の車に向かった。

車に入ると琴吹のねぎらいの言葉が待っていた。

「お疲れ様でした。残り物で悪いんですけどお菓子がありますよ。」

あとお茶も。」

「おお、ありがとう。」

と、お礼を言ってもらおうとしたときにはすでに3分の1くらいはなくなっていた。

「これおいしいね。ムギちゃん。」

どうやらなくなっていた原因はこいつらしい。

なんていう早業だよ。

それから琴吹がいなくなるまでの1時間はたつぷりとティータイムにさせてもらった。

単純作業って意外と肩とかこるからな。

「あ、唯ちゃんそろそろ交代の時間じゃない。」

「本当だ。じゃあ行ってくるね、ユウ君。」

「おーっす。んじやいつてらっしゃい。」

さてと、それじゃ一眠りでもしようかな。

そう思って眠りに入った2分後。車に入ってきた者にゆすられながら起こされた。

「おーい起きろよ。田辺。暇だから何かして遊ぼっぜ。」

やかましい田井中め。俺の安眠を妨害しやがって。

「あー。もうせつかく寝てたのに。」

「だって暇なんだもん。」

俺を起こしたことはさも罪悪感のないようにさらっと言い放つ。

「とりあえず罰1発な。」

そういつて、田井中のでこにデコピンを打つ。

「あうっ。痛ーっ。女の子に暴力振るうなんて最低だぞ。」

「そついうのは時と場合によるんだよ。それに今のはあくまで罰だから暴力じゃないし。」

反論すると秋山に泣き寝入りした。

「漣。田辺がいじめてくる。」

が、秋山もこつちサイドに付いた。

「自業自得だ。」

「そんな。漣まで。」

まあ秋山の場合付き合い長い分、信頼の上だろうけどな。

「そついや、田井中お前なんか暇つぶし道具とか持ってきてないのか。」

ふと、気づいた暇な原因かもしれないことを聞いてみる。

だが返ってきた答えはまったく違った。

「うーん。やっぱり田井中って呼ばれるより律って呼ばれたほうがシツクリくるから律って呼んでよ。」

「まあ良いけど。ッてそうじゃなくって質問返しするな。」

「あ、そつだこの際だからみんな名前で呼ばない。」

「人の話し聞いちゃいねえな。こいつも平沢に近い人間なのか、秋山。」

シュー

聞いてみた秋山はすでにノックダウンしていた。

そついやこいつ、結構恥ずかしがりやなんだっけ。

そんなやつに男が名前呼ぶこと考えたら普通こつなるか。

こりやすぐには直りそうもないからしばらく置いてくかな。

その予想は外れてすぐに復活した。

「わ、私は、名前で呼んでくれても良いよ。」

復活が早いだけでなくさらに予想を裏切る発言が出た。

「え、良いのか。呼ぶたびに気絶したりしないか。」

「だって同じ軽音部の仲間だから。いつまでたっても他人行儀じゃちょっと。」

秋山も少しは、がんばってんだな。

「じゃあ、まあよろしくな。漣」

名前で呼んだとたん真っ赤になる。

これも少しずつ改善していけばいいか。

「はい、漣はOK。じゃあ、あとは唯とムギだな。」

「あ、平沢は、唯はさっきもう名前で呼ぶことになったから。」

「なッ、いつの間に二人はそんなかんけい」になってないからな。」
「ありゃ、違ったか。」

どんな勘違いしてんだよこいつは。

「違うに決まってるだろう。大体名前で呼ぶだけでなんでそうなるんだよ。」

「いや、今のはボケだよボケ。本気じゃないって。」

要するに俺はいじられ役兼つつこみ役をこのメンバーの中ではなくちゃならないのか。1番苦勞する立位置だな。

しばらくすると田井中、いや律はかばんの中からなにやら雑誌をこそごそと取り出し裏にある懸賞はがきを書き始めた。

まあ、どうせドラムとかのたぐいの懸賞だろう。

秋山は、澪は何を書いているのか予想せずに単刀直入に聞いていた。

「律、それ何書いてるの？」

「懸賞はがきだよ。商品はなんとギターだよ。」

へえ、こいつは見えないところで唯に協力してるのか。意外といいやつかもな。

「確かにそのほうが早いかも。」

「だろ。」

律は自慢げに懸賞はがきを見せる。

「そんじゃ、まあがんばってください。俺はやっぱり寝とくから。」

あ、そうそう時間になったら起こしてくれ、律。」

言うだけ言つとさつさと音楽プレイヤーを付けて完全に寝る体勢に入った。

約1時間後。俺は律に起こされたが決してバイトの続きではなく単に昼食を食べるためだった。

近くの公園に行きビニールシートを引き、唯が持ってきてくれたお弁当をみんなで食べる。

まずサンドウィッチをみんな食べてみた。その感想は、

「おいしいー」

「お、うまいぞこれ。」

「おいしいな。」

「お、案外うまいなこれ。」

みんな大絶賛だった。

「これ、唯が作ったのか？」

「ううん、妹が作ってくれたの。」

そうか、まあ唯が作ったにしちゃあ美味すぎるか。

食後にはいつものように琴吹が持ってきてくれたお菓子が待っていた。

「なあ、琴吹、いつもこんな高そうなお菓子もらってるけど良いのか？」

「いいのよ。いつもいろんな方からいただいて家にあっても余らせてしまうから。」

余るほど高そうなお菓子をもらってやはりこいつは何者なんだ。

っ、と冷や汗が流れる。

「あ、そういえば名前で呼ぶんじゃないかったのか。」

律が少し忘れていた件を思い出して発破をかけてくる。

「はいはい。忘れてたから次からな。」

でも、やっぱり男女比が4対1で昼食ってやっぱりなんか場違いな感じがするな。

昼食が終了したから今度は俺と律の番からなんだけど、

ブーンッ

カチッ

あーめんどくさい。何ならこのまま帰りたいけど、唯のためだからがんばるか。

それに律はあてにならないしな。

ブーンッ

カチッ

今頃、車の中ではまたおやつタイムなんだろうな。

ブーンッ

カチッ

・・・

そんな単純作業を1時間続けた。もちろんその中には律との会話が
あって決して飽きて寝てしまうほどではなかったが。それでも単純
作業は疲れる。

そんなこんなでその後はたいしたことなくただ平凡にその日のバイ
トは終了した。

「やっと1日目終わったー。あー長かった。」

「じゃあ、私は駅へ行くから。」

「あたしと漕はバス。」

「俺は自転車で来てるから。」

「唯は歩いて帰るんだっけ。」

「うん。そっだよ。」

「あしたも「お菓子よろしく。」・・・がんばりましょって言おうとしたんだけど。」

やはり、こいつは根本から改善したほうがいいのか？

「そんじゃ、そろそろ俺は帰るから。」

「おう。」

「バイバイ。」

「また明日。」

それぞれ、自分の帰る方向に帰った。

俺が自転車を止めていた駐輪場を出ると少し離れたところに唯がいた。

「おーい、唯。家まで送って行ってやろうか。」

「え、いいの。やったー。」

そついうが早いか自転車の後ろに飛び乗ってきた。

「途中で落ちたりするなよ。」

忠告して俺は速めのスピードでこぎ始めた。

平沢家！（前書き）

今回はオリジナルです。

原作とは一切関係ない話なのでいつもより一層めちゃくちゃになっ
ていると思います。すいません。

平沢家！

キー

唯の案内で、家の前まで送り届けた俺は、そのまますぐに帰ろうとしたが、夕ご飯に誘われた。

「あ、待ってユウ君。どうせなら、夕ご飯うちで食べて行かない。」

「いや、別にいい。そんなに家が遠いわけじゃないから。」

俺は遠慮と言う意味で断っておく。

それにいろいろ迷惑だったりするだろうしな。同学年の男子を家に招くと。

「そんな事言わないで良いじゃん。送ってもらったお礼だよ。」

「だからいって、別に。それにお前の親にも迷惑だろうし。」

「うち、今2人ともいないから大丈夫だよ。憂がいるだけだもん。」

「憂？ああ、妹な。じゃあ、その妹に迷惑かかるから俺は帰るから。」

「

さっさと断って帰ろうとするが、なかなかそうさせてくれない。

「大丈夫だって憂なら話せば分かってくれるって。」

「だからほんとにいいって。そろそろ帰るからな。ちゃんとかぎ閉めとけよ。」

「そんなに遠慮しなくっていいって、ほら。」

「え、ちよつとちよつと。」

最終手段、実力行使で帰ることにしようとしたが、向こうも実力行使に出て俺は無理やり家に引きずり込まれることになった。

はー。なんか空気が居ずらいな。

「ただいま、憂。」

「あ、お姉ちゃんお帰り。あれ後ろの人は誰？」

「ジャン、これがユウ君なのです。実は今日帰り、送ってもらったんだ。だから、お礼も兼ねてうちで夕ご飯食べていって貰うことにしたの。」

俺はまだ食べていくとは言っていないだが勝手に言ったことになってるな。って言うか俺はもの扱いなのか。

「そうなの、お姉ちゃん。あ、いつもおねえちゃんがお世話になってます。妹の平沢憂です。それと、今日はおねえちゃんを家まで送って下さってありがとうございます。是非、有ご飯を食べていってください。」

ど、どれだけよくできた妹なんだよ。まるで、唯のいいところを全部吸い取っていったみたいじゃねえか。もしかして姉と妹逆なんじ

やねえのか。

「まあ、今おまえの家にいる2人ともがいって言うなら、一応ご馳走になっていくわ。っていうか憂ちゃんにはまだ名前ちゃんと名乗ってなかったな。多分こいつから聞いて名前は知ってるだろうけど、田辺優生です。よろしく。」

「こちらこそよろしくお願いします。さて、今日はお客さんが来るから張り切って夕ご飯作らなくちゃ。じゃあこれで失礼します。」
憂はそういつて台所に向かっていった。

「ね、言ったとおりだったでしょ。憂なら話せば分かるんだから。」

「ああ、確かに。お前が姉とは思えないほどよくできた子だったな。実は、血はつながってないとかいうおちはないだろうな。」

「ユウ君ひどい。ちゃんと私の妹だよ。」

プウとふくれる。

行動はまるでガキそのものだな。

「へいへい。」

軽く受け流しておく。

「じゃあ、夕ご飯ができるまで私の部屋で待っててよ。」

「はいよ。」

唯の部屋は割と普通だった。まああんまり女の子の部屋に入ったことがないから基準がややあいまいだが。

さて、何しておこう。部屋に居てと言われても案外やることねえな。

暇なので部屋の中をぐるぐる回っていると本棚に漫画を見つけた。

しゃあねえ、これで暇つぶしておくか。

漫画の１ページ目を開いたまさにそのとき、唯が部屋に入ってきてお呼びがかかった。

「ユウ君、夕ご飯ができたって。」

「・・・お前、絶対今タイミング見計らって入ってきただろ。」

「へ、なんで？」

「いや、わざとじゃないならいい。気にするな。」

「えー、何々、気になるじゃん。」

「で、夕ご飯は憂ちゃんが作ったのか。」

「うん、そうだよ。憂が作ってくれたんだよ。」

こいつやっぱ天然だ。完全に話しに流されてる。

「それに今日はユウ君が来たからいつもよりちょっとだけ豪華なん

だよ。」

「……………」

こいつ、夕ご飯のレベルを上げるために俺を呼んだんじゃないのか。
まあ、どちらでもいいか。

リビングに降りてみると、テーブルの上には数々のおいしそうな料理が並んでいた。

す、すげー。

「な、なあ、憂ちゃん。もしかしてこれ全部一人で作ったの？」

「はい。今日はがんばって腕をふるいましたから。」

これ絶対食べきらないともったいないな。

「じゃあ、いただきます。」

「はい。召し上がってみてください。」

「そうそう。召し上がれ。」

パクッ

一口食べてみた。

「どうですか？もしかしてお口に会いませんでしたか。それだった

らごめんなさい。」

「・・・いや、全然OK。むしろすごくおいしい!」

「よかった、どんどん食べてください。」

「ほんと。じゃあ私も食べよつと。」

パクパクという効果音が出そうなほどの勢いで、唯は食べていた。よくそんなに食べても太らないな、と感心して聞いてみると、「私、どれだけ食べても太らない体質だから」だそうだ。

その体質、世間一般の女子から羨まれるんだろうな、と頭の片隅で思いつつも俺も食べまくった。

ほんとに、おいしいからな。

「ごちそうさま。ほんとにおいしかったぞ。また、食べに来たいけど、まあそうそう来れないのが現実だからな。」

「そうですか。残念です。でもまた来てくださいね。」

「ああ、じゃあそろそろ俺は帰るな。」

「バイバイ、ユウ君。また明日。」

「さようなら。優生さん。」

「おう。明日も寝坊するなよ唯。」

自転車に乗って家へと向かう俺。時刻はすでに午後9時を過ぎていた。

知り合いとバイトに行ってくるって言って朝に出たきりだからな、さすがに姉貴とかに問い詰められそうだな。

まあいいか。一緒にバイトに行ってた知り合いと外で夕ご飯食べてきたって言えば。そう言っておけば、姉貴のことだからそうそう追求してこねえだろ。でも女の子が絡んでくるとすっごいミハーになるから気をつけたほうがいいか。

自分で見つけた問題を自分で解決して機嫌よく自転車のスピードを上げた。

「ただいま。」

「あ、お帰り優生。遅かったね。今日ってバイトに行くだけじゃなかったの。」

姉貴が出てきた。まあ、これは全然予想の範囲内だけど。ってことで、ばれないように言い訳しといたほうがいいか。

「ああ、そのはずだったんだけど今日一緒にバイトに行った知り合いたちといっしょに外で夕ご飯食べてきたから。」

「あ、そう。じゃあよかった。実は夕ご飯、あんたが帰ってくるの

遅いし連絡してこないから結構待つてたんだけど先に3人で食べちゃったら残ってなくてさ。作り直すのめんどくさいなーと思ってたんだよね。」

「どうやら、気づかれなかったみたいだ。まあそりゃそうか。普通はばれないからな。」

「別にいいよ。っていうか逆にもう食べる気しないから作ったの残ってても困ったし。」

「じゃあ、お風呂入っちゃいなよ。あと、みんなもう入ったから最後出るときにお湯流しといてね。」

「はいはい。」

そういつてお風呂場に向かおうとしたのだが、予想外の言葉が聞こえてきた。

「そういえば今日一緒にバイトに行ったのって女の子だったでしょ。」

ドキッ

「何で、姉貴がそのことを知ってたんだよ。確か姉貴には何も言っていないぞ。」

その瞬間、姉貴はにやっと笑った。

そして気が付いた。はめられたことに。

「へー、今日一緒にバイトしてたのって女の子だったんだ。あんだ、もしかしてその子のことが好きだったりするの。」

地獄の入り口に立ってしまった。まだ今なら引き返せる。

「違うって。それに今日は軽音部のみんなと一緒にだったんだから2人だけじゃないし。」

「ん？部活のみんなってことは、去年まで女子高だったんだからもちろん女の子の方が多いわよね。ってことはもしかしてハーレム状態だったとかかな。」

睡眠時間を確保するために放った言葉は、逆に自分を追い込む1手となってしまうた。

そんな状態から逃げ出そうとしたがそうそううまくいくはずはない。

「あ、そうだ俺、お風呂に行くところだったんだ。続きはまたあとでな。」

逃げようとした俺の服の襟が引つ張られる。

「逃げようとしたってことは凶星よね。じゃあもつと話を聞きましょうか。」

そついう姉貴の目は輝いていた。

この様子じゃあきちんと答えても睡眠時間がかなり削られることになりそうだな。

平沢家！（後書き）

できればこれを読んだ方、感想や評価を付けていってくれたらうれしいです。

是非お願いします。

ギター！（前書き）

この話を読んでくださっている方々へ

定期テストが近いためしばらく更新が遅れる可能性が高いです。

まことに申し訳ありませんがご了承ください。

ギター！

次の日、俺はバイトに行かなければならないというのにかなり寝不足だった。

それもこれもすべて姉貴のせいだ。あの後、じつくりと聞きだされて終わったのはもはや太陽が昇る1時間前位だった。

あのかそ忌々しい、ミーハーのせいで悲惨な目にあつた。こりゃたぶんバイト中に寝そうだな。

しかも今日のバイトも同じメンバーだって知ってるから今日もまた捕まるんだろうな。

そんなこんな考えているうちに今日のバイトが始まった。

一応今日のペアは部長の律いわく、昨日なつてないペアだそうだ。

まあ多分寝ることになるからどうでもいいが。

その日は結局、自分の当たっていないときはほとんどを睡眠時間に費やし、あたっているときでさえうとうととしては起こされるという完全に寝不足が響いているようなバイト結果となった。

「二日間お疲れ様。」

「『お世話になりました。』」

はーあ。ねむつ。今日は絶対寝るのが早くなりそうだ。

それからみんなが昨日別れたバス停まで何気ない会話をしながらやってきた。

「あ、そうだ。はい、これ。」

そこで律が思い出したのを初めにみんなそれぞれにもらったバイト代を唯に差し出した。

「それにしても1日8000円か。みんなの二日分を合わせると・
・計8万円だな。そこにお母さんから前借りした5万円を合わせて
もまだ足りないな。」

湊が少し、しよげたようにそう言った。

「じゃあ、後何回かバイトするか。」

律がフォローにまわった。

「そうですね。」

そんなやり取りを見て唯は何か考えた後きっぱりといった。

「やっぱり、これいいよ。バイト代はみんな自分のために使って。」

へ？それじゃあ昨日と今日のバイトは無駄なこと？それじゃあ昨日の姉貴の聞き出しも……

「おい、唯。それじゃあ、昨日と今日の分が無駄じゃねえか。遠慮しなくていいからこれ使えよ。」

「ううん。私、自分で買えるギターを買う。1日でも早く練習してみんなと演奏したいもん。」

「・・・そんな事言われたら反論できないじゃねえか。天然ってこういうときに厄介だよな。」

「その代わりまた楽器屋さんに付き合ってもらってもいい？」

「しょうがないな。いいよ。」

「あ、優生そんな事いつて本当は行く気満々なんだろ。素直じゃないな。」

「そんな事ないって。本当は俺抜きでも行けるんだから。というか初心者の俺が行く意味あんまり無いし。」

「まあまあ、そのところはいいいじゃんいいじゃん。」

「律、やっぱりお前はちょっと黙っておくか？」

そういつて関節技をかけるふりをする。

「はい、すいませんでした。」

素直に謝る律。

「ふふ。みんなせつかくの休みだったのにバイトに付き合ってくれ

てありがとね。私、じゃあ帰るね。」

「じゃあ、また明日な。」

「バイバイ、唯ちゃん。」

そして俺もみんなと別れて昨日と同じく駐輪所に止めてある自転車を取り出すと、唯の姿が見えた。

が、何かエアーギターでもしているように動き回っていた。

・・・今日は唯にはかわらないでおこう。

そう決めて少し遠回りだが平沢と接触しないように迂回して家に帰った。

ついでにいつておくと、その日帰ってからも姉貴にこっそりとしぼられたのは言うまでも無い。

〽月曜日放課後、10GIAにて〽

で、結局俺は唯のギターを見るのに付き合うためにやってきたのだが、やはり少しの間であるが唯は例のギターの前で立ち止まってジーツと見ていた。

「唯のやつ、そんなにあのギターが欲しいならもう少しバイトしてお金を貯めればいいんじゃないか。」

「そうだな。よっぽど欲しいんだろうな。」

「よっしゃあ、じゃあやっぱりまたバイトを。」

「あ、ちょっと待ってて。」

そういうと琴吹は、レジのほうに向かっていった。

琴吹のやついい案でも思いついたのか。

数分すると戻ってきていきなり爆弾発言をかました。

「このギター5万円で売ってくれるって。」

「「えー!」」

俺と律は声をそろえて驚いた。

「ちょっと琴吹、お前いったい何をどうしたんだ。なんかやばいことでもやったのか!」

「実はこのお店うちの系列のお店なの。」

「ってことは、それを利用して特別値切ってもらったってことではないのか。」

「ええ。」

・・・ほんとにこいつはいったい何者なんだろう。

「ありがとうムギちゃん。残りはちゃんと返すから。」

まあ何にしてもよかったかな。とりあえずは1件落着だな。

だがそのとき俺は忘れていた、唯の感性は少し人と違うことを。

〈数日後〉

「そういえば、唯。今日、ちゃんとギター持ってきたか？」

「ちゃんと持ってきてるよ。今日の部活楽しみだね。」

「まあな。」

放課後になると、俺と唯は早々に音楽室に向かった。

「ちわーっす。」

「こんにちわ。」

「あ、唯と優生。やっと来た。遅いぞ二人とも。」

音楽室にはすでにほかの3人はそろっていた。

「で、二人とも。今日はちゃんとギター持ってきたよな。」

漣が尋ねてきた。

「ちゃんと持ってきたよ。じゃーん。」

そっいつてギターを取り出す唯。

「「「おおー」「」」

「やっぱりギター持つとそれらしく見えるね。」

「なんか弾いてみて。」

チャラリ〜ララチャラリラララ〜

・・・これってチャル〇ラだよな。

何かで、これってすごい微妙な選曲だな。

「まだ練習してないの?」

「いや〜、だってギターってキラキラピカピカしてて、なんか触るのがこわつくって。」

「ああ、分かる分かる。」

「そんなの知るか。俺なんか親父のお下がりなんだからキラキラもピカピカもしてないんだぞ。それはちよつと贅沢すぎないか。」

「でも、鏡の前でポーズしたり、添い寝したりはしてるんだよ。」

こいつの頭の中はいつたい何が常識になっているんだろうかと一瞬本気で考えていた。

「おい、ちゃんと練習しろよ。って言うかフィルム剥がしてねえじやんか。」

ふと俺は唯がフィルムを剥がしてないことに気づいて、いっきにビツツと剥がした。

「あー！ー！！！」

「そんな叫ぶほどのことじゃねえだろ。」

すると、唯は魂が抜けたようにボーっとしていた。

「おい、優生謝れ！」

澪はそういつが何で謝る必要があるんだ？

「何で謝る必要があるんだよ。普通こっいつのって剥がさないと邪魔だろ。」

「邪魔とかそういうのじゃなくて、せつかく唯が残しているんだからそのまま置いといてあげなよ。」

「はいはい、分かったよ。悪かったな、唯。」

しかしまだ唯は放心している。

「おい。大丈夫かー？」

顔の前で手を振ってみるが戻らない。

「なあ、唯、このままほっとしてもいいか。」

「優生のせいなんだからちゃんと責任取れ。」

「えゝ、でもほっといたら戻るだろ。」

どうやって唯の放心状態を戻そうか困っていると琴吹が何かひらめいたように手を打った。

「あ、そうだ。唯ちゃんお菓子お菓子。」

そうか、唯にはこれが一番だったのを忘れていた。

実際、本当にそれで元に戻った。

でも、澪はそこまで効果が及ぶことに驚いていた。

「そうだよな。やっぱりギターって弾くものだよね。ただ大事にしてるだけじゃかわいそうだよな。」

「それが当たり前だ。お前の頭の中では何が常識なのか俺らにはまったく分かん。」

「えゝそうなの。添い寝したりするのって普通じゃない？」

「だからそこが違うんだって。」

「なんで「じゃあそろそろ練習するか。」はい。」

漣はうまく、ギターと添い寝するのは普通か？ という談義について切り上げさせた。

「そういえば、ライブとかみたいな音を出すにはどうしたらいいのかな。」

「そうそう、ギターやるにあたってちょっとは自分なりに調べてみたけど、アンプとかいう機械がいるみたい。」

「へー、ねえ漣ちゃん。そのアンプってこの音楽室にあるの？」

「あるよ。やってみる？」

「うん。」

「よし、繋いだよ。」

ジャーーン

しばらく音楽室にギターの音が鳴り響いた。

「「かつこいいー！」」

俺と唯は始めてアンプを鳴らした音をじかに聞いて同じ言葉を漏らした。

「やっとスタートだな。」

「私たちの軽音部。」

「ええ。」

俺たちが入る前からいた3人はしみじみとそう言った。

「夢は武道館ライブ!」

律は高らかにそう宣言した。

「ちょっと待て。それはでかすぎだろうが。」

「夢はでっかくって言うからいいじゃん。あ、それと卒業までに。」

「そこまで来ると、単なる暴走だろうが。」

チャラリ〜ララチャラリララ〜

盛り上がっていた律のテンションは、儚く唯のチャルメラに消された。

「ごめん。まだこれしか弾けない。アンプで音を鳴らすのはまだ先だね。」

アンプからコードを引き抜こうとする、唯。

「あぶない!」

漣のその叫び声で俺はとっさに身構えた。

次の瞬間、唯がアンプをはずすと同時にすごい大音量があふれた。

「アンプのボリューム下げる前に抜くとそうなっちゃうんだよ。」

どうやら、それを知っていた漣と律はとっさに耳をふさいだらしい。

卑怯者、ちゃんとそのことを言え！

と、言いたかったが耳へのダメージが大きくそれどころじゃなかった。

「は、早く言つてよ。」

このときばかりは唯の意見に同調した。

中間試験！（前書き）

長い間投稿できなくてすいません。

そのお詫びの意味もこめていつもより若干長めです。

これからも遅くなったりするかもしれませんがよろしくお願いします。

中間試験！

「ギターの弦って怖いよね。細くて固いから指切っちゃいそう。」

ギターのチューニングをしながらそう言う唯。

「え、そうか。これくらいじゃ切れないだろ。」

「それって、優生の押さえ方が甘いからじゃない。」

俺のせりふに漑の的確な突っ込みが入る。

「そうか？」

「そうだぜ。普通は指がスパツと切れて血がどばっと。」

「きゃー。」

「へ？どうしたんだ漑？」

急に悲鳴を上げた漑に理由を求める。

「い、痛い話はだめなんだ。」

・・・自分の指を切ったわけじゃないのに。

「おい、漑。誰も指切れてるわけじゃないんだけど。」

そういつて自分の指を見せる。

すると、すぐに漣はいつも通りに戻った。

「まあ、練習しているうちに指の先が固くなるから血が出たりすることはないよ。」

そういつて唯に手を向ける。

さっきの自分の怖がりようを棚に上げて語るといまいち説得力がないんだけどな。

・・・分かっているならいちいちなんで怖がるんだよ。

そう思ったがあえて口には出さないでいた。

「あ、本当だ。プニプニ。」

漣の手で遊ぶ唯。

それを1分ほど続けていた。

まったくそんな事の何が楽しいんだか。

その後いつものティータイムに入りしばらくしてやっと練習が始まった。

「そういえばさあ、ギターってまず何を練習すればいいんだ？」

「だよね。ギターを練習するって言っても何から始めればいいか分

かないよね。」

「じゃあこれ、はい。まずコードから覚えるといいよ。」

困っている俺と唯に教本という助けの船を出してくれたのは洩だった。

「あ、それ中学校で習ったこと合ったような気がする。」

コードという単語に反応したのは俺だった。

「え、そう？じゃあDとかcマイナーとか分かる？」

「いや。まったく。ただなんとなく聞いたことがあつと様な気がするだけで弾けない。」

「そっか、じゃあ全部覚えなきゃだめだな。」

シュー

教本を見ていた唯がオーバーヒートしたみたいだった。

「まずは楽譜の読み方から教えてください。」

「え、マジで読めないの？」

「はい。」

ハア

ひとまずすごい苦労しそうな未来だけは見えてきた。

最終下校のチャイムが鳴り響き帰り支度を済ませると俺は、中間テストに向け勉強するためにさっさと帰ることにした。

「それじゃあ、俺は先に帰るぞ。」

「あ、じゃあね、ユウ君。」

「バイバイ。また明日。」

「おう。」

校門を出るとすぐに和輝に捕まった。

「おーい、優生。」

「お、和輝か。そっちもクラブだったのか。」

「ああ、まあ今年は1年生しかいないし人数が少ないしで、いろいろ大変だしな。」

「そうか。まあ、こっちも1年生しかいないっていうのも人数が少ないって言うのも同じ条件だけだな。」

「でもいいじゃん。何せそっちはお前以外女の子の部員なんだろう。だったらまさにハーレムじゃん。」

「いや、そんなの関係ないし。っていうかそんなの興味ないから。」

正直な話、みんな誰がかわいいとか言うのがよく分からない。というか、かわいいから何なんだとかよく思う。

だからその手の話題は俺にとってどうでもいいものだ。

「そつえばさ、もうすぐ中間テストだけど和輝はちゃんと勉強してるのか？キャプテンとかやらなきゃいけないから忙しいのはよく分かるけど。」

「えつ。中間テスト？」

「・・・お前まさかまだ何にもやってないとか？」

「・・・はい。中間テストなんて存在すら忘れてた。」

「お前、それは本当にやばいだよ。」

「いや、でも中学の頃もちよつとやっただけである程度の点数は取れたから大丈夫だよ。まだ1年の1学期の中間テストだから中学校の続きみたいなんだろうし。」

少し現実逃避を図っているようだ。

中学校とのレベルの差がいかにあるか知らないみたいだからちよつと黙っておいて1回悲惨な点数を取らせてみようかな。

あ、そうだ。

「なあ、じゃあ今度の中間テストで賭けしないか？勝った方が負け

た方にジューズおごるっていうので。」

「え、でもそっちの方がちょっと有利なんじゃないか。部活がある日数もそっちの方が少ないし。」

「まさか勝つ自信がないのか。まあそれならやらなくてもいいけど。」

さりげなく挑発をかけてみる。

「まさか。よし、その賭け乗ってやろうじゃないか。」

見事に引かなかった。

「じゃあ、負けたほうがジューズ1本おごるな。忘れるなよ。」

「そっちこそ。言いだしつぺはそっちなんだからなこの勝負は無効とか言い出すなよ。」

テスト返却後

「負けた・・・」

俺の解答用紙を見ながら和輝がわめいている。

ちなみに俺は、全て85点以上をとることに成功したのに対し和輝はというと。

「数学と英語が追試って。そのうえほかの教科も赤点すれすれじゃ

ん。」

「面目ない。でも、俺の他にもうちのクラスもう一人追試のやついるんだろ。」

「みたいだな。誰か知らないけど。つーかよくこのテストで赤点取れたな。逆にすごいわ。」

「いや、野球部立ち上げたばかりだからいろいろ忙しくて。」

「だから、ヤバイって言ったのに。」

「アーアーア。聞こえません。」

ガキじみたことを始めたのでとりあえずおでこにデコピンをかましておいた。

「痛っ。何すんだよ。」

「お前が、ガキじみたことをするからだ。って言うかそろそろ俺は部活に行くからな。お前もいつまでも落ち込んでないでさっさと行けよ。」

部室

部室に着くとなにやらさっきの和輝以上に落ち込んでいる唯がいた。

「どうした。そんなにテストの結果が悪かったのか？」

「追試だそうです。」

12点の答案用紙を見せながら言う。

・・・うちのクラスのもう一人の追試ってこいつのことだったのか。それにしてもよかったな、和輝。うちのクラスでは最下位じゃなかったみたいで。

「大丈夫よ。今回は、勉強の仕方が悪かっただけじゃない。」

「そうそう。ちょっとがんばれば追試なんて余裕余裕。」

そういつて律と紬は唯を励ます。

「勉強は全然してなかったんだけどね。」

「励ましの言葉返せ！」

「って言うかお前なんで勉強しなかったんだよ。」

「いや〜しよと思ったんだけど、試験勉強中ってさ勉強以外のことに集中できたりしない？」

悪びれもなくそう言うのでデコピンを1発かましておいた。

こいつ、和輝よりひどい理由だな。

「いたっ。ユウ君ひどい。」

「お前のこの点数を取った理由があんまりにもひどすぎるからだ。まったく。」

「だって勉強の息抜きにギターの練習始めたら抜け出せなくなっちゃって。結局全然勉強できなかったの。」

みんな落胆した。

「でもね、おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ。」

誇らしげにピースをする。

はあ

「その集中力を少しでも勉強に回せばよかったのに。」

「そういうりっちゃんはどうだったのさ。」

「ん、あたし？このとおり余裕ですよ！」

89点の解答用紙を自慢げに唯に見せる。

「こんなキャラ、りっちゃんのキャラじゃないよ。」

「賛成。なんか裏ありそう。」

俺と唯は律のイメージとかけ離れた点数に驚きつつ怪しんでいた。

「おーほっほっ。あたしくらいの人間になるとなんでもそつなくこなしちゃうのよ。」

「りっちゃんは私の仲間だって信じてたのに。」

「そんなもの信じてたならお前がちゃんと点取れ。」

「だつて」

「嘘つくな、律。」

「「うそ?」「」

油井と俺の声がはもる。

「律、テストの前日に私に泣きついてきたんだよ。」

「わっ、凄、ばらすなよ。」

「それでこそりっちゃんだよ。」

律の肩に手を置きうれしそうな顔で言う唯。

「赤点取ったやつに言われたくねえ!」

「そういう裏があつたわけね。道理で俺より点数がいいわけだ。」

「え、優生に勝つたの。」

「ああ、俺は85点だったよ。律に負けてるのに違和感あつたけどこれで納得だな。」

「うるさい。結局あたしより悪かったんだから。」

「そついえば澪ちゃんとムギちゃんは何点だったの？」

澪と紬の答案用紙を受け取る唯。

俺も横からのぞき見る。

93点と97点。

すっげー。

「ま、まあこんなもんだよな。あたしぽかミスしちゃったからさ。」

強がる律。

そんな律を見て俺と唯は無言でうなづく。

「お願いだからスルーはやめて。」

数日後

「今日は唯のやつ遅いな。」

「確か俺より先に出て行ったはずだけど。何でまだ来てないんだ？」

「さあ。」

ガチャ

「あ、来た来た。唯、遅いぞ。」

「ごめんごめん。あ、今日は羊羹だ。」

入ってくるなり目ざとく今日のおやつを見つける唯。

って言うか最近あんまり練習してないな。

「で、どこ行ってたんだ？確か俺より先に教室出て行ったよな。」

「うん。職員室に呼び出されてた。追試の人は合格点取るまで部活動禁止だつて。」

羊羹を食べながら言う。

「「「「えー！」「」「」

唯以外のみんなが叫ぶ。

「結構厳しいな。」

「じゃあここにいろのもまずいんじゃない。」

「大丈夫だよ。お菓子食べに来てるだけだし。」

「っんなわけねえだろが。」

超天然なせりふをはく唯に1発でこピンをくらわせる。

「いたつ。痛いよ、ゆ・・・」

文句を言う間もなく今度は律にチョコレートスリパーをかけられる。

「お前、お菓子食べておしゃべりするのもうちの部活だろうが。ここにすることがばれたらかなりまずいことになるんじゃないかねえのか。下手したら休部とか。」

「え、それはまずいよ。唯、追試はいつあるの？」

「1週間後だよ。」

「1週間後か。」

「それだけあれば毎日ここに来て大丈夫だよ。」

「あほか。」

唯に本日2度目になるデコピンをくらわせる。

さらに今度は1言も言う暇なく本日2度目のチョコレートスリパーをくらう。

「ここに來ること自体がやばいんだよ。そのことを分かってるのか？」

「唯が追試に受かってくれないといつまで経っても安心できないよ。」

「そうだぜ唯。それに早く受からないと唯も演奏できないんだぜ。」

「それは、嫌だよ。」

「じゃあがんばれ。」

「うん。私みんなと演奏したいからがんばる。」

「唯ちゃん。その意気よファイト。」

「任せてよムギちゃん。」

唯の任せてはあんまり信用できないんだけどな。

ま、それにしてもやつとがんばる気になったか。

ちゃんと1回で合格してくれたらいいんだけどな。

追試！（前書き）

珍しく1週間で2回目の投稿です。

追試！

唯の追試前日

バンッ

部室の扉が開いたと思うと唯が飛び込んできた。

「澪ちゃん助けて〜」

「え、勉強してたんじゃないの？」

「できなかった〜」

「「え！」」

律と俺は跳び上がって驚く。

一番の懸念事項がまさにぴったりの中した。

・・・これはちょっとヤバイな。

「どうしよう澪ちゃん。」

「うーん。よし。じゃあ今晚は唯の家で特訓だ。」

「え、特訓って勉強教えてくれるの？」

唯の目が期待に輝く。

「うん。」

「よかったな唯。漣に教えてもらえば合格点間違いなしだぜ。」

「漣ってそんなに教えるのうまいのか？」

「うん。うまいんだぜ。一夜漬け教えるの。」

「押しするのがそこかつ！」

「おい！ちゃんと教えるよ。」

「だよな普通。」

「それじゃあ今日はこれで解散でいいよな。」

「そういつて帰り支度をする俺。」

「え、ちょっと優生どこ行くの？」

「どこ行くのって帰るんだよ。今日の課題済ませて読みたい本があるから。」

「何、言ってるんだよ。優生も唯の家に行くに決まってるじゃん。」

「いや俺、人に勉強教えるのとか苦手だから行っても無駄だつて。」

「いいじゃん、いいじゃん。私も教えられないけど行くんだから。」

強引に俺の未来を確定させる律。

こいつ人の事情まったく気にしてないな。

まったく。

「今日はお父さんは出張でね、お母さんも付き添いでいないから気兼ねしないでいいよ。」

「おい、唯。お前、憂って言う妹がいただろ。」

平沢家の人間で出ていない人間がいたので聞いてみる。

「あ、うん。憂は多分帰ってきてると思うよ。」

「それだとお邪魔にならないかしら。」

紬は少し心配する。

「唯の妹だろ。全然大丈夫なんじゃない。」

少し笑ってそう言う律。

どうせ唯そっくりな妹を考えているんだろう。

その考えでいると絶対びっくりするな。

そのときの反応が楽しみだ。

知り合ってからもうすでに2回目となる唯の家に着いた。

「へえ、ここが唯の家か。唯の部屋が楽しみだな。散らかってたりしそうだよな。」

律はそういうがそれほどひどくなかったぞ。

・・・前に俺が来たときは。

「さあ、みんな上がって上がって。」

「」「」「お邪魔します。」「」「」

奥から憂ちゃんが出てきた。

「お姉ちゃんお帰り。あ、優生さん。お久しぶりです。っていうことは軽音部の人たちですか？」

「あ、はい。」

丁寧すぎる憂に律もかなり小さくなっている。

「はじめまして。妹の憂です。いつも姉がお世話になってます。」

人数分のスリッパを並べる憂。

その様子にみんなぼかんとしている。

ぶつ。この顔、携帯でとつてみたい。

そんなみんなを置いて唯は2階の自分の部屋に上がる。

「みんな、こっちこっち。」

「それにしても、姉妹でこつも違つとわねえ。」

「え、何が？」

「妹さんに唯のいいところ全部持つていかれたんじゃないのか？」

「ひどい！」

若干涙目の唯。

コンコン

「え、はい。」

「あの、皆さんよかつたらお茶どうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですが。」

みんな驚いてる中、俺は驚かない。

これくらいこの子にとっては当たり前だからな。

お茶がみんなに配られる。

「憂ちゃんは今年生？」

「中3です。」

「お、ひとつ違いじゃん。」

「受験生ですね。」

同じことからでも感想は皆まちまちだ。

「はい。」

「どこ受けるかもう決めてる？」

「できればお姉ちゃんと同じ桜ヶ丘に行きたいんですけど、私の学力で受かるかどうか。」

お姉ちゃんっ子だな。

「大丈夫だって。今、追試受けてる唯でも通ったんだから憂ちゃんなら通るって。」

「お姉ちゃんに勉強教えてもらえばいいんじゃない。」

「あ・・・、それは大丈夫です。自分で出来ますから。」

遠回しに唯が馬鹿だってこと認めたな。

「あははは。断られたぞ。」

「え、何で何で。」

「で、でもお姉ちゃんはやるときにはやる人ですから。」

唯をかばう憂。

「えへへ。」

「じゃあそろそろ始めようか。まずこの問題から。」

実際1人が教え始めるとほかの人は暇だったりする。

特に教えることの出来ないメンバーである俺と律は。

仕方ないので、前に読みかけた漫画を取り出し読み始める。

「お、漫画あんじゃん。私も読もつと。」

俺に便乗して漫画を読み始める。

だが、その取った漫画はギャグ漫画だった。

「ふふ・・・あはははは」

「あーもう、うるさい律！」

うるさい律に遷の鉄拳が落ちる。

うわっ。結構痛そうだな。

結局部屋の隅に追い払われることとなった律。

俺みたいにおとなしく漫画を読めばいいのに。

しばらくすると、正座をしていた唯がなにやら足をもぞもぞさせ始めた。

「足がしびれちゃった。」

それを見た律は足をちよんとつついた。

「ぎゃあー」

叫ぶ唯。

「律!!」

きれた湊はもう1発鉄拳を落とす。

ガンッ

今度は完全に音まで聞こえてきた。

まあ自業自得だな。

さらに部屋までも追い出される。

その時点ですでに4時半過ぎだった。

「もうだめゝ集中力が続かないよゝ。」

あっさり音をあげる。

「おいおい、初めてまだ30分しか経ってないよ。」

「唯ちゃんケーキ持ってきたから後で食べよ。だからそれまでがんばって。」

唯の扱い方を心得ている紬。

ケーキの単語に反応し猛スピードで問題を解き始める唯。

ガチャ

「おう、みんなやつとるかね。」

変なせりふとともに律が入ってきた。

だがすぐに出て行く。

それを数回繰り返した後、ついには受身で入ってくるなんともはた迷惑な入り方をしてまたもう一発洩の鉄拳を食らうこととなった。

さつきから何回か受けてるのに懲りないなんて馬鹿か。

「あーもう律が余計なことするから唯がやる気なくしたじゃないか。」

「そつだよりっちゃん。私やる気なくしちゃったよ。」

わざとらしく濡に便乗する唯。

「絶対うそだ。私が出来なくてもやる気なくしてただろ。」

「そんな事ないよ。でもせっかくだし今ケーキ食べちゃおうよ。」

「まったく仕方ないな。食べたらすぐにまた続けるからな。」

「やったー。ムギちゃん、ケーキケーキ。」

「はい。」

ムギはケーキを取り出す。

「俺はいらないから。」

「何でユウ君？おいしそうだよ。」

不思議がる唯。

「だって俺、今日何もしてないし。」

「別にいいわよ。これ本とは今日、部室で食べる予定の分だったから。」

「そつだぜ。私も何にもしてないのに食べるんだから優生も遠慮せずに食べればいいじゃん。」

律にあきれる溼。

「律は、遠慮なさすぎだ。」

「まあ、いいか。じゃあ遠慮なくもらうわ。」

「じゃあいただきます。」

まず先頭を切って食べようとするのはやはり唯だ。

「いただきます。」

「おいしい。」

「うん。このために生きてるって感じ。」

大げさな唯と律。

「お前らそこまで言うほどのことじゃないだろ。」

「甘いよ、ユウ君。女の子は甘いものには目がないんだよ。」

「あつそ。」

「スルーされた。」

ピンポン

呼び鈴が鳴った。

どうせ憂ちゃんが取りにいつてくれるだろ。

「誰だろうな。」

「誰でもいいだろ。勝手に人の家の事情を探ろうとするな。」

「わかったよ。」

タッタッタッ

誰か上がってくる。

ガチャ

「あ、和ちゃん。」

「どう、唯。勉強はかどってる?」

「うん、おかげ様で。」

「皆さんが軽音楽部の?」

「あ、紹介するね。こちら秋山澪ちゃん。田井中律ちゃんに琴吹紬ちゃん。後、ユウ君。」

「」「よろしく」「」

そういえば、俺はみんな知ってるけど、俺と唯以外の軽音部のメンバーと和は知り合いじゃなかったんだな。

「真鍋和です。唯とは幼馴染で近所で高校でも同じクラスになりました。」

「幼稚園からほとんど一緒なんだ。」

「不思議な縁よね。それよりほら、サンドウィッチ作ってきたわよ。」

「おお、ちょうどおなか減ってたところ。」

「さっき食ったケーキはどこへ行ったんだよ。」

「それとこれとは別腹だよ。ねえ、りっちゃん。」

「おう、全然OK。出して出して。ごっつぁんです。」

律と唯にせかされてサンドウィッチを出す。

「あ、そうだアルバム出して来よっと。」

「唯、食べたらすぐやるんだぞ。」

「分かってるよ、食べてる間だけ。」

がさがさと本棚を探す唯。

「あ、あつたこれこれ。」

「そういえば唯、私が熱出して休んだとき毎日プリント持ってきて

たりしてくれたわよね。」

感慨深くそう語る和は少し年寄りくさく見えた。

「私、風邪ひいたことないから。」

「そうね。でもその持ってきてくれたプリントの中に唯の数学のテストが入ってたんだよ。」

「あははは。お前は前からそんなだったのか。」

「でもあのときすつごく助かったのよ。」

「えへへ。」

「それだったら律も。」

「ぎゃあ、それはやめて〜」

「何だ？教えてくれ。」

「実はね律ってば……………」

そんな会話をしているとあっという間に時間は過ぎていくものだ。

実際俺も少し時間を気にはしたが放っておいた。

午後8時

「ところで、勉強大丈夫なの？」

和がふと切り出した。

「」「」「あ。」「」「」

俺と和以外は忘れていたようだ。

まあ、とやかく言う俺も半分以上忘れかけていたけどな。

「やばい、早く続き教えて洩ちゃん。」

「う、うん。じゃあ、やろつか。」

「うん。後、和ちゃんありがとね。」

「いいえ。それよりも唯、追試がんばりなさいよ。」

「うん。任せて。だって洩ちゃんに教えてもらってるんだもん。大丈夫だよ。」

それからしばらくは本当に何もないまじめな勉強時間が進んだ。

なので俺と律はまたもや取り残される。

「じゃあここまでが試験範囲だから集中していくよ。」

唯が最後の章に取り掛かったのはいいが、かなり眠そうだ。

あ、座ったまま寝た。

「おい、起きろ唯。唯。」

漣が唯を揺り起こす。

「はっ。」

唯が起きた。

「りっちゃん隊員、ご武運を。」

意味不明なことを言っただけで涙ぐむ。

「おい、唯。いつまで寝ぼけてんだ。早くしゃっきりしろもう最後なんだから。」

俺は仕方なく唯を励ます。

「へ、あ、うん。もう大丈夫。漣ちゃん続き続き。」

「うん。X二乗・XY+6Y二乗・・・・・・・・」

漫画も読み終わってきた。

律が立ち上がって部屋から出て行った。

やっぱり自分の本を持って来ればよかったかな。

退屈だから憂ちゃんになんかにか聞いてみようかな。

1階に下りると律と憂ちゃんがゲームを始めたところだった。

「おい、律何やってんだ。」

「お、優生。優生も一緒にやるか？」

「いや、やるかじゃなくて。」

「えーじゃあ、やらないんだ。」

意地悪く笑う律。

「・・・やっぱり俺もやる。」

「そう、来なくっちゃ。」

しまった。乗せられた。

そう思ったときにはもうすでに憂ちゃんにコントローラーを代わってもらっていた。

トンツトンツ

階段から誰かが降りてきた。

お、終わったのかな？

「おーい、律、優生。」

「終わって今から帰るのか？」

「あ、うん。・・・優生たちは何してるの。」

「ゲームだけど。ちなみに俺の全勝。」

ピースをする。

それを見て澪はあきれていた。

追試当日

ムギは、お茶があふれているのにも気づかないくらいボーっとしているし、澪は落ち着きなくうろうろしている。

よほど、唯のことが心配なのだろう。

それに対比するように俺は静かに本を読んでいた。

「唯、大丈夫かな。」

「大丈夫だろ。」

「もっと心配しろ!」

「だって心配したところで結果は変わらないし。昨日あれだけやったから大丈夫だろ。」

ガチャ

燃え尽きたような唯が入ってきた。

「あ、唯。どうだった？」

「・・・うん。」

「合格しそう？」

「・・・うん。」

まったくのそら返事だ。

それくらいに燃え尽きている。

これはちょっとやばいな・・・

みんなもかなり表情が引きつっている。

数日後

相変わらず、澪とムギはかなり心配していた。

「唯、ちゃんと合格点取れてるよな。」

「大丈夫よ、きっと。あれだけ勉強したんだもの。」

ガチャ

少し足元がおぼつかない唯が入ってきた。

や、やばい。

本能的に唯が追試に失敗したと思った。

「ど、どうだった？」

「どうしよう澪ちゃん。」

「まさか、だめだったの？」

震える手で持ち上げたその答案用紙は・・・

「１００点取っちゃった。」

左上に１００の文字が書かれていた。

「まじ！お前極端すぎるだろ！」

「じゃ、写真撮らなきゃ。」

「ちょっと一回落ち着け。」

「だって１００点だよ！前に取ったのなんか覚えてないくらい前だよ。写真撮らなきゃ。澪ちゃん取って取って。」

「う、うん。」

すっかり唯のペースに飲まれ、あっさりと１００点と唯を映した。

「それにしてもよかった。とりあえず一段落だな。」

「さて、それはどうかな。」

「優生、それどういうこと?。」

「ちょっと唯、ギターでC、Aマイナー7、Dマイナー7、G7つて弾いてみて。」

「あ、優生コードわかるようになったんだ。」

「まあな、おかげさまでぼちぼちな。」

「ねえ、ユウ君。」

「何だ。」

「コード忘れた。」

「がくっ」

俺以外の3人はずっこける。

「やっぱりな。そりゃ、あんだけ短期間で追試対策したらそりゃそうなるのは当然だな。」

「えへへ。」

「これでわかった? また1からやり直してことだ。」

ショックを受けたようだがこれが現実なんだから仕方ない。

またじっくり覚えていけばいいさ。

合宿？（前書き）

最近は少し調子がいいので更新数がこの1週間で3回目です。

最初のほうではありえなかったですね。

では、どうぞ。

合宿？

「合宿をします！」

今日は珍しく細が遅く、お菓子がないのでさて練習を始めようかと思つた時に漣がやって来た。

そして高らかに合宿宣言をしたのだつた。

「合宿？」

「そう。もうすぐ夏休みだし。」

「お、もしかして海？それとも山？」

「遊びに行くんじゃないやありません。バンドの強化合宿。朝から晩までみっちり練習するの。」

「おお、それいいな。そろそろいろいろ教えて欲しいところとか出てきたし。」

賛成する俺。

「でしょ。だから律や、唯たちも・・・」

「新しい服買わなきゃ。」

「水着も買わないとな。」

やはりだが、遊ぶ気満々の唯と律。

故に漣が怒るのは当然。

「話を聞け！」

ほらな。

「おい、お前らちょっとは話を聞いてやれよ。」

「はい。」

「じゃ、どうぞ。」

「おほん。夏休みがあげたら桜高祭でしょ。」

張り切って合宿と言い出したわけを話し出す漣。

そういえばそうだったな。

「あゝ。桜高祭か。」

「そう、桜高祭での軽音部のライブって言ったら昔は有名だったんだよ。それなのに・・・」

「桜高祭か」

「高校の学園祭ってすごいんですよ。」

また勝手に盛り上がり始める二人。

そんなんだつたらまた漣の雷が落ちるぞ。

「はいはい、私メイド喫茶がやりたい。」

「えゝ、お化け屋敷だよー」

メイド喫茶とお化け屋敷どっちがいいかでつもめ始める二人。

「おい、お前ら。うちは軽音部だからライブするのが普通だろ。」

「でも、メイド喫茶のほう（ガンツ）い、痛い。」

俺が、ライブを希望してもさらにメイド喫茶を押す律には、漣の鉄拳が落とされることとなった。

そつえば漣ってよく律を殴るな。

「何で私だけ・・・」

「私たちは軽音部なんだからライブやるの!」

律は一応自分だけ殴られたことに抗議するが、若干怒っている漣の前ではスルーされた。

ガチャ

「ごめんなさい遅れちゃって。」

一番入ってはいけなような微妙なタイミングで紬が現れた。

「マドレーヌ、食べる・・・？」

「へーそうだったの。」

俺は紬に現状を説明するために合宿のことについて話した。

「ムギはどう思う？いくらあわてずやっていこうって言っても、もう3ヶ月になるのに1回もあわせたことないんだよ。」

「まあまあ。」

少しまだ怒っている澪をなだめる紬。

「でも私は行きたいわ。みんなでお泊りに行くの、夢だったの。」

紬は、かなりハイテンションだ。

みんなで泊まりに行くぐらいで・・・ん？泊まり？

俺は「泊まり」という言葉に引っ掛かりを覚える。

「澪！ちよつと待った！その合宿のメンバーの中には俺も入れられるのか？」

「そうだけど。」

「いや、それおかしいって。お前ら4人は女で俺は男だぞ。普通そのメンバーみんなで泊まりに行くのって難しいだろ。」

「まあ・・・そうなんだけど。優生は悪い人じゃないって分かっているから。」

「いや、だから、そんなところで変に信用されても。」

「さっきからユウ君は何でそんなに合宿に反対してるの?」

出た！天然！でも今はそんなのかまっている精神的余裕はない。

「もう、分からない奴はちょっと意見出さないでくれ。分かる奴はこの案を止めてくれ。」

「いいじゃん。だってみんな軽音部の仲間なんだから。」

願いむなしく律が追い討ちをかけてくる。

お前まで敵に回ったのか。

ちよつと落ち着け俺。一回状況を把握してみよう。

漚 この案の発案者↓ほとんど意見ひっくり返らない　つまり合宿賛成派

唯 天然↓ひっくり返る要素がない　つまり合宿賛成派

絀 合宿を楽しみにしている　今のところ賛成派

律 面白半分で俺をはめようとしている↓みんなが反対しない限り
反対しない　つまり合宿賛成派

よって俺以外みんな賛成派

ってやばい!!

「やっぱりだめかな？」

上目づかいで俺を見てくる漑。

律の「軽音部の仲間」+漑の上目遣い+紬の楽しみにしている顔+唯の天然・・・いやこれは関係ないな。

まあそこまでされているので断ろうにも断れない。

「はあ、仕方ないな。行くよ、行きますよ。」

「イエイ。全員参加決定！」

やけにテンションが上がる律。

「そうだな。」

「で、全員行ってくて決めたのはいいんだけど結局どこに行くんだ？」

「そうだね、いくら位かかるんだろう。」

俺の懸念事項が一番やばそうな唯が心配する。

「確かにちよっときつくないか？」

「そ、それは・・・」

答えに詰まる漑。

「ね、ねえムギ。別荘とか持ってたたり「ありますよ。」・・・」

平然とそういう漑。

俺の頭の中のお嬢様度がまた1段階上がった。

「じゃ、じゃあそこ借りれたりするかな？」

「ええ、大丈夫だと思いますよ。」

「お願いしちゃっていいかな。」

「はい。分かりました。」

合宿当日

午前10時。

集合時間になった。

「唯のやつ遅いな。昨日あれだけ忠告したのにまさか寝坊とかしてるんじゃない。漑、ちょっと電話してみて。」

「はいはい。」

携帯を取り出し唯に電話をかける漣。

「おはよう。」

若干暗い声からして本当に寝坊だったみたいだな。

『ごめんなさい』

少し離れている俺にまで聞こえてきた。

「謝るのいいから唯、早く支度して来て！」

プチッ

ハア〜

いつものことだけど今起きたところだったら間に合うかな？

数時間後

俺たち軽音部は紬が持っている別荘に向けてど田舎の路線に乗っていた。

「ふう〜何とか間に合った。」

「まったく。あれだけ昨日寝坊しないように言っていたのに。」

「ごめん。なんかワクワクしてなかなか寝付けなくて。」

「分からないわけでもないけど、もうちょっとであと1時間待たなきゃいけないところだったんだからちよつとは反省しろ。」

そういつて紬のほうを見る。

「ムギちゃん・・・夢だつて言つてたもんね。」

「ふふふ・・・ゲル状がいいの。」

なにやらわけ分からない寝言に漑は驚いていた。

「よし、写真に収めとくか。」

そついつてカメラを取り出す漑。

「よしなよ。かわいそうだよ。」

「唯、お前止める気ないだろ。」

「ユウ君だつて。」

「俺は建前言つてないからな。」

パシヤッ

「んっ・・・あ、ごめんなさい。」

「ほら、起きちゃった。」

「悪い、悪い。そうだ、それよりもそろそろ教えてよ。別荘ってどこにあるの？」

「えーつとですね。」

説明しようとした瞬間、運悪くトンネルに入ってしまった。

「もうすぐです。」

トンネルを抜けるとすぐそこには青い海が一面に広がっていた。

「すっげー。」

一気にテンションの上がるみんな。

最も本を読んでる俺は変わらないが。

「海か。」

「はい、海です。」

「唯。」

唯に声をかけ窓に手をかける律。

そして唯も。

「せーの。」

ぱつと窓を引き上げる二人。

当然海から潮風が吹いているので列車内にも風が入ってくる。

パラパラッ

俺の読んでいた本のページがめくれていく。

「あーっ。せつかく読んでたのに。どこ読んでたか分からなくなっ
た！」

そんな俺の悲鳴はきれいに無視された。

もう少し誰か気遣ってくれてもいいのに。

「うわー。潮の匂いだ。」

「泳ぐぞー。」

「だから遊びに来たんじゃなくて。」

漣は、まだずっと練習する気にいるようだ。

あーもう。

人のつかの間の読書タイムを邪魔しやがったな。

少し怒ろっかなと思ったがやめた。

大人げないからな。

紬の別荘は思っていたより大きかった。

が、しかしそれでも1番小さいのだという。

「さあ、入って入って。」

中に入ると中もやっぱりかなり広かった。

部屋のあるテーブルの上には果物が載ったお皿が置いてあった。

「なあ、紬。これって食べてもいい分なのか?」

「いいですよ。でも何もなくていいって言うておいたのに。」

許可をもらったので、お皿の上にあるりんごを一つとってかじった。

でも、謝ってきたが何が問題なのか俺にはさっぱりだった。

「そういえば、ベースとかってどこにおくのか?」

「ああ、それならこつちよ。」

そういつて案内してくれる紬についていく俺と遷。

その間も唯と律は、別荘の中を探検してはしゃいでいたのだが。

「ごめんなさいね。いつもなるべく普通にしたいって言ってるんだけどなかなか分かってもらえなくて。」

ガチャッ

「どうぞ。」

絨が開けた扉の先にはドラムやアンプなどが置かれた広い防音システムが付いた部屋だった。

「おゝすげーな。」

「しばらく使ってないからちゃんと動くか心配だけど。」

確認に少しアンプをいじる漣。

「うん。大丈夫そう。」

かなりうれしそうだ。

「あれ？唯と律は？」

「あの二人ならさつきからずっと部屋を探検してた。」

「まったくしょうがないな。」

二人をあきらめてカバンからラジカセを出した漣。

「それなあに？」

「あ、これ。」

漣が再生のボタンを押すと、すぐうまい曲が流れ出した。

「昔の軽音部の学園祭のライブ。この前部屋で見つけたんだ。」

「上手・・・」

「私たちより相当うまい。」

「うん。」

「なんか聞いてたら負けたくないなって。」

この合宿をするって言い始めた原因が分かった。

「そっか、だから合宿するって言い出したのか。」

「うん。でも・・・」

心配していることはよく分かる。

多分唯と律だろう。

あの二人はすごく遊ぶ気満々だからな。

「負けないと思う。」

「えっ？」

「私たちなら。」

「ムギ」

バンッ

扉がいきなり開き、唯と律が入ってきた。

「よし、遊ぶぞー」

「おー！」

「はやっ！練習は！？」

「先行ってるから3人とも急いでね。」

そっいつてまたあわただしく出て行った。

「それでも・・・」

「え、ええ。」

「3人ともってことは俺もかよ。」

「みたいね。」

「おゝい、はやく。」

廊下の先から俺たちを急かす声が聞こえる。

「まったく。俺は海に入らないからな。」

そういつて2人の後を追う俺。

本当はちよつと練習したかったけど、あの二人は遊ばないと戻らなさそうだから仕方ないよな。

ちよつと心の中で言い訳して海に向かうのだった。

合宿？（前書き）

ついにPV10000突破です。

やっとここまで来ました。

次の目標はPV20000突破ですね。

合宿？

「それにしても暑いな。」

ジリジリと暑い太陽が照り付けてくる中、俺は砂浜に寝転び空を見上げていた。

BGMとしてうちの部員たちが海ではしゃいでいる声が聞こえる。

まったく合宿に来たのに遊んでどうするよ。

しばらくすると熱が体にたまってきた、水着を持ってこなかったことに激しく後悔した。

やっぱり紬に頼んでパラソルでも貸してもらうかな。

そう思い紬を探す。

「あ、いたいた。おい紬。ちょっとパラソル貸して欲しいんだけど、どこにある？」

見つけた紬は砂で城を作っていた。

しかしそれは子供が作る小さなものではなく、腰ぐらいまである大きなものだった。

「パラソルなら多分倉庫にあると思いますよ。持ってきましたよっか？」

「いや、どこにあるか分かったんならいちいち女の子に運ばせるのはちょっと気が引けるから自分で持ってくるよ。」

「そうですか。」

「それにしてもその城すごいでかいな。」

「気が付いたらだんだん大きくなって。」

「そうか、まあがんばれ。」

「はい。」

倉庫の中は探すまでもなく1番手前にパラソルが置いてあった。

それを砂浜に持って行って立てる。

ついでに倉庫にあったレジャーシートを引いてその上に寝転ぶ。

海風が吹いてきてちょうど気持ちいい。

気持ちいいのでだんだん眠くなってくる。

バンッ

ちょうど寝てしまつか、寝ないかの境目のときにビーチボールが顔に飛んできた。

そしてきれいに鼻に直撃した。

「痛いっ。誰だよ。ボール飛ばしたの。」

「よしっ。命中。次、唯の番な。」

「了解です。りっちゃん隊長。」

「おーまーえーらーかー。」

二人のコントを見ながら静かに怒る。

多分俺の後ろには少しくらいオーラが出ているだろう。

そしてさっき飛ばしてきたビーチボールを拾い空中に投げ全力で律の顔をめがけて打ち込む。

バコッ

俺が当たったときより重い音が響き渡り律が後ろに倒れる。

ちよっとやりすぎたかな。

そんな心配は皆無だった。

ぱつと律は起き上がった。

「不意打ちとは卑怯だぞ。」

文句を言ってくる律。

「あ、そうだビーチバレーしようよ。」

さすがは唯、突然すぎるひらめきだな。

「おー、それいいね。バレーボールで勝負しようぜ。それでさっきの分の仕返しできるし。」

「嫌だ。この暑い中なんでわざわざビーチバレー何かしなくちゃいけないんだよ。っていうか仕返して言うけど先にやって来たのそっちだろうが。何で俺が先にやったみたいなことになってるんだよ。」

「まあ、お堅いことは気になさんな。ささ、こちらへどうぞ。」
なぜか年寄り言葉になる律。

「だから嫌だつて。こんなに暑いのに動きたくない。」

ちょうどそのとき大きい雲が上を通りしばらく陰りが続きそうな状態になった。

「ほら。陰ってきたじゃん。な、だから行こうぜ。」

俺はきつと神様とやらの嫌われているんだな。

そう解釈してあきらめる。

コートを用意して、チーム分けをすると2対3になるので運動神経が一番よさそうな律と組みたかったのだが、律がさっさとチーム分けをしてしまったので、自動的に漣と俺が組むことになってしまった。

「漚、お前は後ろで守っとけ。女が相手なんだから俺一人である程度は大丈夫だから。」

そう声をかけると、漚は真っ赤になっていた。

しばらくなんで赤くなっているのか分からなかったが水着であると気づいて納得した。

それに俺、男だしな。

「おっしやあ、行くぞ優生。必殺ミラクルサーブ。」

「お前、勝手に先攻取るのかよ。」

律の打った球はどうやってたらそこに行くのか分からないくらい変な軌道を描き海に飛んでいった。

「先攻とった上に変なところに飛ばしてるし。」

ため息雑じりに俺の後ろでため息をつく漚。

どうやら今のでいつも道理の漚に戻ったようだ。

「悪い悪い。」

そういつて海からボールを拾ってきた律からまた再開した。

結果、9割以上のサーブをブロックして、こっちのサーブはなぜか返ってくる前に全て落ちるという結果で俺と漚が圧勝したのだが。

それが終わると俺はまたビーチパラソルの下に帰り、今度は持ってきた本を読み始めた。

そして気が付くといつの間にか夕日が沈む時間帯になっていた。

「あー！練習！」

少し向こうで漣が叫んだ。

おい、忘れてたのかよ。

「おい、お前ら。そろそろ戻らないと本当に練習する時間なくなるぞ。」

「っていう優生も今まで言っていなかったから忘れてたんだろ。」

「まあな。」

「あ、認めた。」

「俺はこんなしょうもないことで逃げたりしないからな。」

「ま、いいや。とりあえずみんな戻ろっか。」

「そうですね。」

そろそろとみんなで戻る。

「じゃあ、とりあえず夕ご飯食べよっか。」

そう提案する律。

「おい練習はどうするんだよ。」

「ちゃんと食べたら練習するって。」

俺はその律の言葉を信じちゃいないが、結局のところ俺もかなり腹が選っていたので夕食にすることにした。

「仕方ねえな。まあ実際俺もかなり腹減ってたからやっぱり夕ご飯にするか。」

それに同調するように漑のお腹も鳴った。

顔を赤らめる漑。

「ちゃ、ちゃんとご飯食べたら練習するからな。」

照れ隠しにそう言ってそそくさと台所に入っていた。

夕食後

スタジオに行くと律と唯はいきなり床に寝転がった。

「あゝお腹いっぱい。」

「あゝ床が冷たくて気持ちいい。こうやって目を閉じるとなんか波

に流されてる感じがするよね。」

「あ、本当だ。」

「おやすみなさい。」

「おやすみ。」

眠くなった二人は練習そっちのけでその場で寝ようとする。

「お前らしい加減にしろよ。特に律、お前さっき夕ぐ飯食べたらするって言ってたよな。」

「始めるぞ。」

「ふたりとも起きて。」

それでも起きる気配はない。

「ムギちよつとどいてて。」

そう言っつて漑はアンプを持ち上げふたりの真上の位置に置く。

そういうことか。

「俺も手伝おうか？」

「お願い。」

「じゃあせーのでいくよ。せーの。」

俺と漣はその瞬間ギターとベースで大きな音を出す。

しかし、それでも二人は少し唸った程度で起きそうな気配はない。
なかなかしぶといな。

仕方なく実力行使で起こす事にした。

ふたりのおでこにデコピンを1発ずつたたきこむ。

なので起きた二人のおでこはしばらく赤くなっていた。

ふらふらとポジションにつく二人。

「なあ、今日の練習やめにしようぜ。」

「練習が目的でここに来たの。」

漣が少しキレかける。

「そりゃあそうだけどさあ。」

漣はふと、いたずらを思いついたような笑みを浮かべた。

「そういえば律。最近ちょっと太ったんじゃないか。」

「え！」

「特にお腹のところとか。」

動揺しまくる律。

「最近ドラム叩いてないからかな？」

ドラムをあわてて叩きだす。

さすが遷。律の扱い方を心得てるな。

「もうギター持てない。」

そう言ってギターを置く唯。

「おい、まだ始めたところだろ。またデコピン打ったほうがいいか？」

「だってこのギター重いんだもん。」

「だから軽いのかいろいろあったのになんでそっち選ばなかったんだよ。」

「誰だ、このギター買うつて言ったの。」

「お前だろ！」

かなりの大声になって突っ込む。

こんな調子で練習できんのかな。

数分したら唯は諦め、律も収まり、結局床に寝ころぶのが二人とい

う状況がまたできてしまった。

「まったく、学園祭のとき失敗しても知らないぞ。」

「大丈夫だって。」

あくまで能天気な律。

「どこからそんな自信湧いてくるんだよ。」

「さあ〜?」

「あ、そうだ。花火しようよ、花火。」

「だから唯、お前はいつもなんで急に話、変えるんだよ。」

「えーいいじゃん。それよりも花火、花火。」

「よし。じゃあ唯外行こうぜ。」

唯の提案に律が乗っかる。

「あ、私も行く。」

紬まで。

結局花火賛成派に押し切られて花火をすることになった。

「まったく、これが終わったら練習するからな。」

西瓜を食べながら澪は言うが、正直あんまり説得力がない。

「分かってるって。」

律は紬と顔を見合わせる。

「せーの！」

唯がギターを持って立ち、その後ろに噴出花火がバツッと吹き上げる。

唯がギターを弾き始める。

まったく、やってくれるな。

しばらくすると、今度はロケット花火が打ちあがる。

でも、予測はついていたが予算の都合上すぐに花火は終わった。

だが俺はそれが終わってもしばらくぼーっとしていたのだと思う。

何しろ終わってどれくらい経ったか自分では分からないからな。

気が付いたら昼間聞いた昔の軽音部のライブの演奏が流れていた。

『お前らが来るのを待ってた』

悪魔のような声が流れた。

さらに叫び声のような声が流れる。

カチッ

「あれ？」

「テープがB面に変わったのね。」

「なんだ・・・ん？」

「聞こえない聞こえない聞こえない。」

そういえば濡ってこういうの嫌いなんだったの忘れてたな。

っていうか・・・

「今更耳ふさいでも遅いだろ・・・」

そんな濡を見て律はニヤツとする。

なんかいろいろやばそうだからさっさと退散しよ。

濡の後ろに回り込み何かをささやいてる律や、それを危険と感じない紬と唯を放って俺ははさっさとスタジオに戻った。

それからしばらくすると怒っている濡、その後ろに謝りながら付い

てくる律、なぜか笑顔な唯、心配そうな紬、が帰ってきた。

「だからごめんって。」

謝る律に顔を背けすねる漑。

「何だ、あのあと何かあったのか？」

「実はね、りっちゃんが漑ちゃんが怖がることを言って追い打ちをかけちゃったの。そしたら漑ちゃんが泣き出しちゃってさっきまでみんなで慰めてたの。」

「はあ〜」

実に馬鹿らしい。

「それからね、唯ちゃんがさっき聞いた曲弾けるって言うんだけど・・・」

「そんなわけないだろ。だっておれも今日の昼にあれ聞くまで聞いたことなかったし、それにあいつも俺と同じ初心者だぞ。」

「まあ、見てて。」

ギターで音を奏で出す。

その音は本当にさっきの曲と同じだ。

「嘘・・・」

「まじ・・・」

あっけにとられるみんな。

「はい、どう？」

少しだけ弾き終わった唯は俺たちに感想を求めてくる。

「すごい。完璧。」

拍手をする紬。

「でも、ミヨーンってところが分からなくて。」

「それってチョーキングのことじゃない。」

「なにそれ？」

初心者の俺たちは尋ねる。

「チョーキングっていうのは、音を出しながら弦を引っ張ること。」

唯のギターを借りて教えてくれる澪。

「「おおー。」」

「じゃあ、やってみて。」

「うん。」

ミヨーンと音が鳴るとなぜか唯は笑い出した。

「ふふふ、あははは。なんかこれ変。」

つぼにはまってみたくて、何回も鳴らし出す。

笑いが収まるまで少し時間がかかりそうだったので、その間に俺はお風呂に入っておいた。

そして上がってから自主錬をしていた。

どうせ、明日も多分遊び中心になるだろうからな。

みんなが上がってきた。

「よしじゃあ、寝る前にみんなで一通り合わせておくか。」

珍しく部長らしい意見を言った。

「珍しいな。でもやる気があるなら今のうちにやっておかないと損だからやろっぜ。」

「そうだな。ほとんど練習してないんだからそれくらいはしないとな。」

みんなそれぞれ自分の楽器を持ちチューニングを済ませる。

「ワン、トゥー、スリー、フォー」

結果だけを先に言うと練習は大成功だった。

意外と俺や唯もうまく合わさっていた。

まあ、一番下手だったのは俺だったけど。

それでも楽しかった。

みんなで音を合わせるのは想像以上に楽しく盛り上がった。

数日後

「ごめんください。」

「はい。あ、律。もしかして写真ができたのか？」

「うん。はい、これ。」

「おお、サンキュウな。」

ぱつとすべてに目を通す。

ん？

「なあこれって・・・」

「よく撮れてるだろ。」

そこにあつたのは、明け方の寝ている時の写真だった。

しかも、めっちゃ寝相が悪い状態の。

ちゃんと部屋は別だったんだけど何で写真撮りに来るかな。

「この写真他の奴には絶対に渡すなよ。」

「分かってるって。それじゃあ、次唯の家に行かなきゃいけないからそろそろ行くよ。」

合宿？（後書き）

すみません。7年使ってきたノートパソコンが壊れました。

なので、これからは居間にあるデスクトップしか使えなくなったので更新スピードが落ちると思います。

山中先生！（前書き）

一応前に書いておいたのですが、今は少し更新が遅くなります。
ただ、これも年明けごろには完全にスピードが戻ると思います。

山中先生！

「「「えー！」「」」

細のびつくり発言に俺と漣、律がそろって驚く。

「軽音部が正式な部として認められてないってどういうことだよ。」

「さつき講堂の使用申請に行ったら正式な部として認められてないって言われちゃったの。」

「部員が4人集まったら大丈夫じゃなかったの？」

「確かに、ミスで5人だったとしても足りてるのにな。」

「そのはずなんだけどな。」

みんな考えを巡らせる。

「もしかして2人入部届け出してないとか？」

「わ、私は出したぞ。」

俺の意見に一番反応したのは律だ。

「自分が疑われるって分かってるなら普段から疑われないように行動しろ。」

「だ、だって。」

「でも、クラブって認められてなかったのに音楽室好き放題に使ってよかったのかな？」

もつともな心配だ。

「い、今まで何も言われなかったから大丈夫だよ・・・きっと。」

「っていつか、部活じゃなくても部活らしい活動してるからきっと間違えたんじゃないか？」

そうであると願いたい。

「それだったらいいのにな。」

「それよりこういう理由なのか聞きに行かないとな。」

「そうね。」

「あれ？そつえば溇は？」

ふと思い出したように溇を探す律。

確かにそつえばまだ今日は見てないな。

「あ、溇ちゃんならまだあそこで怯えてる。」

部屋の隅のほうを指す唯。

「おい、そろそろ帰って来い！」

「あ、いた。そもそもなんであいつあんなことになってんだ？」

「実はさっき私、指の皮向けちゃって。」

そう言つて人差し指にまかれたばんそうこうを見せてくる唯。

「そのあと私がマメがつぶれたふりして漑をいじって遊んでたらあそこまで隅っこに行っちゃてた。」

律が漑の反応で楽しんだのがさらなる追い打ちになつたらしいな。

「お前は馬鹿か。漑の性格一番知っているのはお前だろ。だったらああなることくらい予想してやれよ。」

いつものことだから放っておいてもいいけど、そろそろ叱っておかないといけないので注意をしておく。

「分かつてるよ。ただちょっと遊んでたら、こつなっただけじゃん。」

「まったく。」

「はい。ごめんな、漑。」

「見えない見えない見えない見えない……」

まだ、耳をふさいでいる。

こりゃ重症だな。

「ほら、大丈夫だから、遷そろそろ戻って濃い。」

そういつて唯を引っ張っていつて指のばんそうこうを見せる。

それを見た遷はいつもどおりにやっと戻った。

そして咳払いをひとつして、

「まあ、とりあえず生徒会室に行つてなんで部として認められてないのか聞きに行こうよ。」

「たのもー!」

「部長はあたし!」

わけの分からない掛け声で生徒会室の扉を勢いよく開ける二人。

そんなことしたら内申点に後々響いてくるんじゃないのか?

「あら、唯。」

「和ちゃん?」

生徒会室の中にいたのは和一人だった。

そういえば、こいつ生徒会に入つたの忘れてたな。

「へー、和ちゃんなんでここに？」

「何でって生徒会に入ったからだけど。」

「え！すごいね。さすが和ちゃんだね。」

「お前ら、ほんとに幼馴染・・・？」

唯の天然なせりふに律も二人が幼馴染であることを疑った。

「で、まあそれはいいんだけど何で軽音部が正式な部として認められてないのか和は知らないか？」

「何？まだ、軽音部って部として認められてないの？」

「どうも、そうらしいのよ。」

いつの間にか入ってきていた紬が答える。

「ちょっと待って、確認してみるから。」

そう言って、本棚からひとつのファイルを探しだし、取り出した。

そしてファイルをめくっていく。

「うーん。やっぱりリストにはないわね。」

「そんな〜」

やっぱり軽音部が部として認められてないことに落胆する唯。

「もしかして・・・」

「りっちゃん。何か心当たりが？」

「うん。おそらくこれは『ガツンッ』痛っー。」

またいつものコントが始まりそうになったので手近あった、ハードカバーの本で叩いておいた。

「今は、コントなんかしている場合じゃないだろ。」

「あの、それってたぶん部活申請紙が出てないからだと思うんだけど。」

リストにない原因を考えてくれた和。

「部活申請紙？」

「そんなの聞いてないぞ。」

「聞いてるだろー!!」

入り口付近に暗いオーラのようなものをまとった澪が立っていた。

「やっぱりお前のせいかー!!」

ほっぺをつまんで引っ張りまわす。

「まあ、澪ちゃん落ち着いて。りっちゃんにも悪気があったわけじ

やないんだし。」

「ムギは甘いんだ。」

そんな様子を見て和はつぶやいた。

「なんていうか、軽音部は唯にぴったりだと思うわ。」

「え？」

「だろ。実際、中に入ってみると余計そう思えてくるところで。」

「はあ。仕方ないわね。私が何とかしてあげるわ。」

「「「「本当!?!?!」」」」

「助かる。悪いな和。」

「いいわよ、唯の面倒見てもらってるお礼だから。」

棚から、新しい部活申請用紙を取り出し書いていく。

「軽、音、部つと。部員は5人よね。顧問は？」

「「「「顧問?」」」」

「あんたたち、顧問いなかったの・・・」

あきれたように俺たちを見る。

「いや、うちの顧問って山中先生じゃないのか？」

「何で？」

「いや、だって俺とか唯とかの入部届けを出したのもあの人だし、ちよくちよく顔出してるし。」

それに少し、おかしな点を見つけた漣。

「そういわれてみればそうだけど、でも山中先生って新任だろ。普通はこういう時って去年までやってた先生が引き続きするんじゃないの？」

「ええ、普通はね。でも去年軽音部の顧問やってた先生は転任しちゃったみたいよ。」

漣の発見をあつさりと破ったのは和だった。

「まあ、どっちでもいいんじゃない。どうせ確かめに行けば分かることだし。」

「そうだな、じゃあちよつと確かめてくるか。」

「山中先生。」

「あら、何か用かしら。」

「先生って軽音部の顧問ですよね。」

「え？違うわよ。私は吹奏楽部の顧問よ。」

漫画ならみんなの後ろにがーんという文字が書かれたことだろう。

そこから一番早く機転が利いたのは律だった。

「な、なら軽音部の顧問になってください。」

「まだ顧問いなかったんだ。」

少しあきれたような先生。

「お願いします。先生しか頼める人がいないんです。」

「ごめんなさい。なってあげたいのはやまやまんだけど、掛け持ちにはちょっと・・・。」

「先生。大丈夫です。顧問っていつでも実質名前だけですから。練習とかも自分たちで今までやってきましたし、後は顧問の先生だけです。」

「時間は取らせません。」

「お願いします。」

俺が言った今までちゃんとしてたので大丈夫ですよ的なアピールに続きみんなでたたみ掛ける。

「ちょ、ちょっと。」

それに、山中先生もたじたじになっていた。

そんな中唯は、じっと山中先生を見つめて

「先生つてこの卒業生ですね。」

「え、ええ。」

「さっき昔の軽音部のアルバム見ていたんですけど・・・」

「えっ。」

今、明らかに顔色変わった。

これ絶対何か隠してるんじゃないのか。

「どうかしたのか、唯？」

漣は先生の反応に気づかなかっただけらしい。

「アルバムはどこなの？」

「へ、部室ですけど。」

唯が答えた瞬間山中先生は走り出していた。

「え、ちょっとなんか隠してるみたいだけど追わなくていいのか？」

「大丈夫だよ。たぶん先生が探してるのはこれだから。」

唯はポケットから一枚の写真を取り出した。

「何でこれが先生の探している物だって分かるんだ？」

律はたずねる。

「だってここに写ってるの山中先生だよ。」

「」「」「えー！」「」

ま、マジかよ。今の先生からは想像が付かないぞこれ。

「じゃあ、とりあえず部屋に行ってみよ。そろそろアルバムを開いてこの写真がないことに気づいてるかもしれないし。」

「やっぱり先生であってましたか。」

「ほら、この人。」

律は持っていた写真をぱつと前に出す。

涙目になる山中先生。

あれ？これってそんなに開けちゃいけないパンドラの箱みたいなものだったの？

「よく分かったわね。そうよ、私軽音部にいたの。」

「意外でした。」

「じゃあもしかしてこの声も。」

カチツとボタンを押すと合宿のときに目標にした昔の軽音部の曲が流れてきた。

そして次にあの声が流れてきた。

『お前らが来るのを待っていた。』

「やめて恥ずかしいー」

現実から逃げる先生の横で

「聞こえない聞こえない・・・」

「まだ引きづってるのかよ。」

「あ、じゃあギターも・・・」

「そっか、弾いて弾いて。」

唯がギターを渡したとたん

「クツクツクツ。しゃあねえな。」

目つきが変わった。

そして、早引き、タッピング、歯ギターと数々のすごい技を披露する。

「おめえら、音楽室好きに使いすぎなんだよ！」

「「「「「ごめんなさい！」「「「「「

みんなそろって土下座で謝る。

「だいたいなー！あつ。」

元の山中先生に戻った。

「今の見た？」

みんなうなずく。

「先生のおしとやかキャラで通すって決めてたのに。」

「先生・・・」

「あれはもう8年も前のこと・・・」

いきなり語りだした先生。

「いったいこの人は何をするつもりなんだ・・・」

顧問！（前書き）

ついにクリスマスも終わり今年も片手で数えられるほどになってきました。

来年は調子よく1月1日から更新できたらいいのになあ。

顧問！

あの子の先生の話をまとめると、

・ 中学の頃好きだった人がいた。

・ その人に告白したところ、その人の好みは『ワイルドな女性』だった。

・ そして、山中先生はその好きな人の好みに合うように『ワイルドな女性』を目指してギターを始めた。

・ しかし、今度はやりすぎて逆の意味で振られてしまった。

つとまあ、面白くもかわいそうな話だった。

結局自業自得だけど。

「所詮そんなものよね。」

悲劇のヒロインのような口調で言う。

「先生・・・」

「いいの。慰めの言葉なんて・・・」

そんな先生の肩に片手を置く律。

「先生、顔を上げてください。」

「りっちゃん・・・」

そして両手を置いた。

「ばらされなくなったら顧問やってください。」

そう脅す。

「りっちゃん、たくましい子！」

「お前、脅して顧問にさせるか。」

「だってこのチャンス逃したら顧問になってくれる人いなくなっちゃうかもしれないんだぜ。」

「・・・まあそうだな。まあこの際手段にケチ付けてる余裕ないか。」

「参りました。ねえ、分かったからこのことみんなに内緒にしてて。」

「分かりました。その代わりちゃんと顧問してくださいね。」

「ん？ムギちゃん？」

その声につられてふと振り返ると、ノートを丸めて望遠鏡のようにして、ボーッとしている紬の姿があった。

「おーい、紬？」

「っっわ。」

びっくりする紬。

「大丈夫？なんかボーっとしてるよ。風邪？」

「う、うん。なんでもない。」

「そう。ならいいけど。」

「それで、学園祭ではどの曲するの？」

顧問をするといったからにはある程度きちんとやるつもりなんだろう。

「一応オリジナルの曲を作ったのでそれをしようかと。」

「へえ、面白そうじゃない。1回演奏してみてよ。」

♪
♪
♪
♪
♪
♪

「っていつ感じなんですけど。」

「どうですか顧問として。」

「そうね・・・前のり後のりとかリズムセクションがばらばらとかいろいろ気になることはあるけどまずボーカルはいないの？」

「あー！」

漣が最も反応した。

何せ、この曲の作曲者だからな。

「じゃあ、まさか歌詞もまだとか・・・？」

「え、えーとですね・・・」

少し危険を感じ取り繕おうとするが、

「それでよく学園祭のライブに出るとか言ってたわね。」

「すいません。」

「音楽室占領して今までなにやってたの！ここはお茶を飲む場所じゃないのよ！」

ついに山中先生がきれた。

そりゃそうだな。

今まで正式な部として認められていなかった上に、こんなめっちゃかな状態で学園祭に出るとか言ってたら、顧問の面目丸つぶれになってしまからな。

「大体ねえ！先生。」ああつ。」

かなり切れて暴走しそうだった先生を止めに入っただのは、意外に細だった。

「あの・・・け、ケーキいかがですか？」

震えながら、ケーキの入った箱を差し出す。

「馬鹿、そんなことしたら余計に「いただきます！」いただくんかい。」

意外な反応につっこみを入れてしまった。

「先生、一緒にお茶もいかがですか？」

「じゃあ、お茶もいただこうかしら。」

さっきまでの勢いはどうしたやらすっかりやさしくなっているのでみんなほっとする。

「紬、今のありがとな。」

いつもの席に向かっていきすれ違いざまにお礼を言っておく。

クスッ

「で、結局歌詞のほうはどうするんだ？」

席に着いた俺は、肝心なことを聞く。

「どうするって？」

「だから、歌詞は誰が書いてくるのかって話。」

一気に静まり返る。

誰もやりたくないってことね。

そんな中スーツと手が上がった。

「じゃあ、私やってみようかな。」

その手を上げたのは、以外にも濡だった。

「え、お前書けるの？」

「うん、一応律に誘われなかったら文芸部に入るつもりだったから。」

「あー、そういえば濡って小学校の頃、県から賞もらったりしてたもんな。」

シュー

あ、またいつものやつだ。

「あっちゃー、これ言ったらまずかったかな。今のなしな。なし」

そついつて律は話を切り上げた。

数日後

「ちわーっす。」

俺がいつもより遅めに軽音部の部室の扉を開くとなにやら山中先生の周りに漑以外が集まっていた。

「あ、優生。漑の詩が出来たぞ。」

「お、本当か？」

「いや、いい詩なんだけどな・・・」

なぜか引き気味の律

集まっているところに行き詩をのぞき見る。

『君を見てるといつもハートドキドキ・・・』

「・・・」

「な、いっただろ。その上、唯とムギは賛成みたいだし。」

「え、賛成じゃだめなのか？」

「って、まさか優生まで賛成なの!？」

「賛成って言うか、反対はしないっていう感じ。」

「・・・うー。それじゃあもうこの歌詞でいくか。」

俺の曖昧だが反対しない意見によって律も折れた。

「「「わーい。」」」

盛り上がる3人。

「俺も別にいいけど、絶対俺は歌わないからな。」

先にきっぱり断言しておく。

「じゃあ澪がボーカルってことで。」

「え！わ、私は無理だよ。」

いきなりのボーカル指名であわてている。

「何で？」

「だって、だって、こんな恥ずかしい歌詞なんか歌えないよ。」

「おい、わかってるならこんな歌詞書いてくるな。」

「困ったわねー。」

「澪がダメとなると・・・」

ふと視線を唯にやると、顔が輝いた。

そういえばこいつもこの歌詞賛成派だったな。

「ムギ、やってみる？」

そんな様子に危なさを感じたのか唯をスルーしてムギに声をかけた律。

「え、私はキーボードで精一杯だし。」

「そっか、じゃあ・・・」

そういつて俺の顔を見てきて、

「優生、「俺はパス。」だよな。」

すべてを言い切る前に断わる。

「困ったな。これじゃあボーカルが決まらないな。」

律にははなっから唯のボーカルという選択肢を省いて考えている。

若干涙目になる唯。

そんな様子を見た律は渋々、唯に声をかけた。

「唯、やってみるか？」

声をかけられたことで急激に元気になる。

「え！私！？でも、歌あんまりうまくないし私で務まるかどうか分かんないっていうか・・・」

「あ、じゃあいいや。」

紛らわしい発言をする唯をあっさり切り捨てる。

「ウソ、ウソ。歌いたいです。」

「律、もう唯でいいじゃん。唯しか歌いたい奴いないんだし。」

仕方ないので唯を援護する。

もっともそうしないと俺に回ってくる可能性が一番高いからな。

「はあ。わかったよ。じゃあ唯歌ってみて。」

「ラジャー。」

『君を見てるといつもハートドキドキ・・・』

「ちょっとタイム。ギター弾きながら歌えよ。」

「あ、そっか忘れてた。」

いつものことだが、なぜここまで天然でボケれる。

♪♪♪♪♪

「・・・今度は歌忘れてるし。」

しばらくすると曲をまた振り出しに戻して演奏し始めたが一向に歌える気配がせず途中であきらめた。

「うっ、ギター弾きながら歌が歌えない。」

そんな様子を見たさわ子先生は、

「仕方ないわね。私が特訓してあげる。」

「先生！」

「じゃあ、まずは歯ギターのやり方から「それはいいです。」チッ。

」

しばらくそのやり取りを楽しんでいたがそろそろ自主練でもするか
なと思ったところ、前にいた漣につつかれた。

「なあ、律、優生。ムギってさもしかしてさわ子先生のこと・・・」

「「へ？」」

いきなりな展開を読めない律と俺。

「いや、だからさわ子先生のことを。」

「え！まじで！？なあムギッ。さわ子先生のこと好きなのか？」

「ちょ、ば、バカ。」

あわてて口が軽い律を止めようとするが、その時にはもう聞いた後
だった。

「え？」

「あれ？ちがうのか？」

「あ、はい。ただ女の子同士っていいな〜って。」

「・・・まさかこいつ、ユリ属性の持ち主なのか！？」

「なーんだ、よかった。」

「いいのかよ！？」

「本人たちが良ければいいんじゃないんでしょうか。」

「えっと、アー。何を言ってるんだ？」

「こんがらがっている二人に小声で説明する。」

「今のセリフ、ようはユリ属性の可能性があるってことだぞ。」

「「ユリ属性？」」

「いや、わからないんだったら今のこと忘れてくれ。」

「まあいつか。」

「あっさり深追いしない律の性格はこういう時に非常に助かる。」

1週間後

「ちわーっす。」

「あ、優生来た。」

「おう、でもやっぱりあいつがいないと盛り上がりには欠けるっていうかなんて言うか。」

「だよな。唯がないと張り合いがないよな。かれこれもう1週間来てないし。」

「そっかもう1週間も来てないのか。」

なぜか老人のような会話をする軽音部員たち。

「でもさ、ちゃんと唯たち練習できてるのか？」

俺は1番心配な点を挙げる。

「うっ。確かに1学期のテストのときも危なかったからな。」

同意する律。

コンコン

「入るわよ。」

珍しい軽音部への訪問者は和だった。

「あ、和だ。珍しいな。」

「今日は、学園祭のライブの件で来たのよ。」

「あ、そういえば忘れてたな。」

「ライブの時の詳細を覚えてもらえるかしら。」

「えーっとベース担当が漑で、キーボード担当がムギ、で、ギター担当が優生と唯で、ドラム担当が私。」

律が言ったことをすかさず何かの用紙に書き込んでいく。

「それで、ボーカルと曲名は？」

「あ、ボーカルが唯で曲名が『ふわふわタイム』」

「そ、そうなの。」

やっぱりこの曲名を聞いた引きか。

そりゃそうだろうな。

くっそ、あの時漑がじゃんけんにさえ勝たなければこんな曲名になることはなかったのに。

「OK。じゃあ出演時間決まったらまた連絡するね。」

「よかった。わざわざ来てくれてありがとう。」

「これも生徒会の仕事だから。でもほんとに唯で大丈夫なの？」

「先週からさわ子先生の家で特訓してるから大丈夫だと思うよ。」

バンッ

いきなり扉が勢いよく開かれた。

そこにいたのは山中先生と唯だった。

「待たせたわね。完璧よ。」

みんな息をのむ。

「さあ唯ちゃん見せてあげなさい。」

♪♪♪♪♪

「「「「おー！」「」「」

前までの唯の演奏を知っている軽音部員は驚きを隠せない。

格段にレベルアップしている。

確かに俺もその点については大いに褒めたい。

ただし、学園祭のボーカルができるかといえば絶対に不可能なのを知っている。

なぜなら・・・

『君を“見”てる“”といつ“”も“”ハートドキドキ』

声が噎^か一^れているからだ。

俺は同じクラスだったからこの事態を知っていたけど知らなかった
らかなりショック受けてただろうな。

「な！」

「てへ、練習させすぎちゃった」

「声“”噎れ“”ちゃった」

「かわい子ぶつてもだめだあ！」

「まったく先生、どうしてくれるんですか。ボーカルがいなくなっ
ちゃったじゃないですか。」

「変更するなら今日中よ。」

今まで黙ってやり取りを見ていた和が口をはさんだ。

「へ！？そうなのか？だとすると・・・」

俺を見てくる律。

「俺は無理だつて。それより第一に歌詞覚えるのがあと3日じゃ間
に合わないって。」

「そつかゝじゃあ、澪しかないな。」

「え！？わたし！」

「そうね、澪ちゃんなら歌詞覚えてるだろうし。」

「歌詞作った本人だしな。」

「頑張つてね澪ちゃん。」

「え、ちょっと、でも。」

あたふたしている澪の肩をたたく。

「もう逃げ場はないぞ。あきらめろ。」

シュー

またいつものように倒れたが今回だけは放っておくことにした。

「ま、身から出たさびってことだな。」

「こら、優生もそんなこと言っていないで澪をどうにかするの手伝って。」

お知らせ

お知らせです。

誠に勝手ながらこの作品の更新を停止したいと思います。

この作品はプロットなしの作品のため主人公の設定がめちゃくちゃになってしまい作者である僕が非常に書きにくくなってしまったことが原因です。

しかし、それでもいいという読者の方は感想のところに継続希望的な文章を送ってください。その数によっては再開したいと思います。またこの作品が再開しない場合はプロットをかためた上で新しい作品を書くつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8510n/>

けいおん！プラス

2011年10月7日23時46分発行